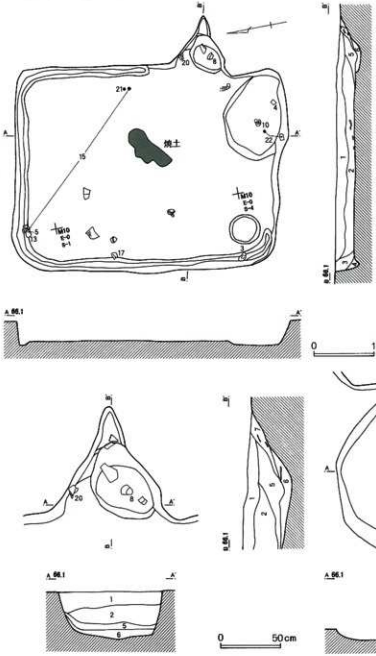
第207図　第118号住居跡

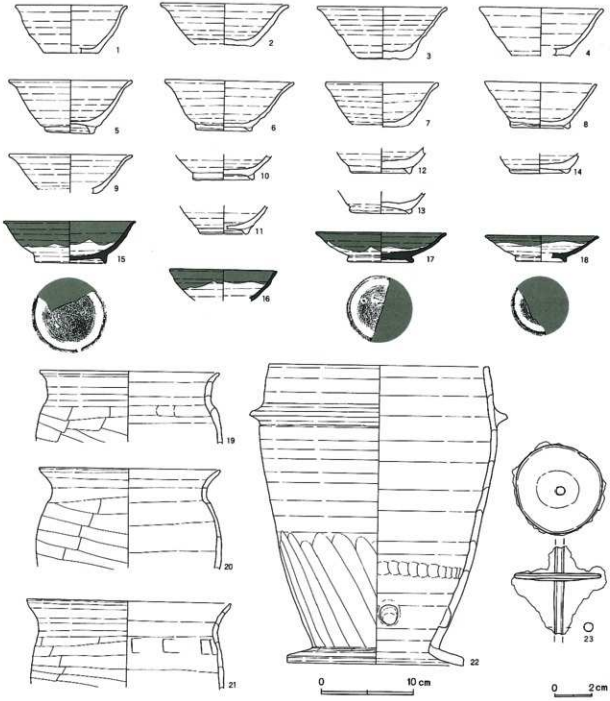


第118号住居跡
1　黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、白色粒子、炭化物、炭化粒子を多量に含む
2　黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子、炭化物を多量に含む
3　黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを少量含む
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
5　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
6　黒褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量に含む
7　黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む

第173表　第118号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	調整	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	12.0	5.0		5.9	B	普通	L	灰白	20	
2	高台付椀	HS	13.6				B, C, E, G	良好	R	暗褐	50	
3	高台付椀	NS	13.8				B, E, I	普通	R	黄灰	50	
4	高台付椀	HS	13.0				B, E, I	普通	L	にぶい橙	50	
5	高台付椀	NS	13.2	5.6		4.7	B, D, G, I	良好	R	灰	100	
6	高台付椀	HS	13.7	5.3		5.4	B	普通	R	褐灰－にぶい黄橙	50	
7	高台付椀	NS	11.8				B, D, E, K	良好	L	灰	50	

第208図　第118号住居跡出土遺物



第174表　第118号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸薬	色調	残存	出土位置その他
8	高台付椀	HS	11.9	4.8		5.9	B, E, I	普通	L	灰黄	40	
9	高台付椀	HS	13.0				B, E, I	良好	L	灰褐	30	
10	高台付椀	NS				6.3	D, E, K	良好	L	明灰褐	100	
11	高台付椀	HS				5.2	B, C, E	良好	R	明赤褐	25	
12	高台付椀	HS				6.0	B, E, G	良好	L	灰白	100	

第175表　第118号住居跡出土遺物観察表（3）

番号	器　種	種別	口径	器高	鐙	底径	胎　土	焼　成	軸輪	色　調	残存	出土位置その他
13	高台付椀	NS				6.0	B, E, I	普　通	R	灰　白	20	
14	高台付椀	HS				6.1	B, D, E	良　好	L	明　黄　褐	100	底部
15	高台付椀	K	11.7	2.7		5.2	B, D	良　好		淡　灰　褐	30	
16	高台付椀	K	11.2				B, D	良　好		淡　緑　褐	30	
17	高台付皿	K	13.7	3.1		6.6	D	普　通		淡　灰　褐	40	
18	高台付皿	K	11.7	2.7		5.2	D	良　好		淡　灰　褐	30	
19	甕ＡⅢｃ	H	19.1				B, E	良　好		外－暗褐。内－淡橙	20	
20	甕ＡⅢｂ	H	19.2				C, E, H	良　好		淡　橙	20	
21	甕ＡⅢｂ	H	21.8				B, E	良　好		明　褐	20	
22	甑　Ｂ　Ⅱ	NS	26.7	30.9	5.4	19.6	B, D	良　好		灰　褐	50	カマド

第119号住居跡（第209図）

M－9グリッドで確認した。周辺の遺構は比較的疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.82m・短辺2.75m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁中央で検出した。袖は検出されなかったが、燃焼部の全体が住居跡内に造られていたことから、造り付けカマドであったと推定した。煙道部入り口の両脇には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は浅く掘り込まれ、煙道部との境に段はみられなかった。煙道部は、整った三角形で、底面は煙り出し部に向かって、緩やかに傾斜していた。煙り出し部は、急傾斜で立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第120号住居跡より古く、第17号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器高台付椀（7）が出土した。

1は、土師器の坏ＢⅡである。

2は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。2は、底部のみである。

3・4は、土師器の甕である。3・4は、胴部上位以下が欠損している。

5は、須恵器（ＮＳ）の甑である。5は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第119号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第120号住居跡（第209図）

M－9グリッドで確認した。周辺の遺構は比較的疎らであった。

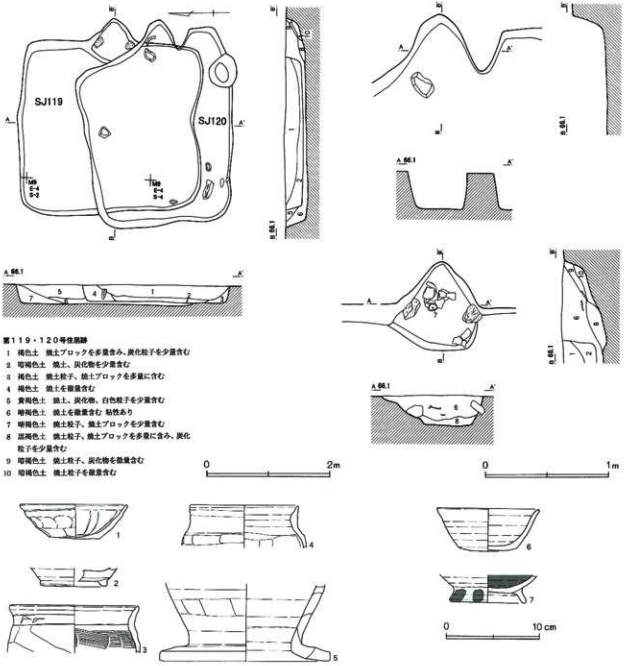
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.06m・短辺2.34m・深さ0.35mであった。南壁の東寄りに、壁と接して径0.55m・深さ0.18mの小穴一基を検出した。

主軸方位は、N－88°－Eであった。

第176表　第119・120号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鐙	底径	胎　土	焼　成	軸輪	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　Ｂ　Ⅱ	H	11.3	3.7		5.1	D, E, F	良　好		淡　橙	100	
2	高台付椀	HS				6.8	B, C, H	良　好	R	外－淡黄褐。内－灰白	30	
3	台付甕	H	13.4				B, E	普　通		暗　褐		口縁部のみ
4	台付甕	H	11.4				B, E	不　良		暗　橙	10	口縁部のみ
5	甑	NS				18.0	B, C, I, K	良　好		外－灰褐。内－明灰褐	25	
6	椀	HS	10.8	4.5		4.5	B, C, E, H	良　好	L	浅　黄　橙	10	
7	高台付椀	HS				7.7	B, E, K	良　好	R	外－赤褐。内－褐	100	底部のみ

第209図　第119・120号住居跡・出土遺物



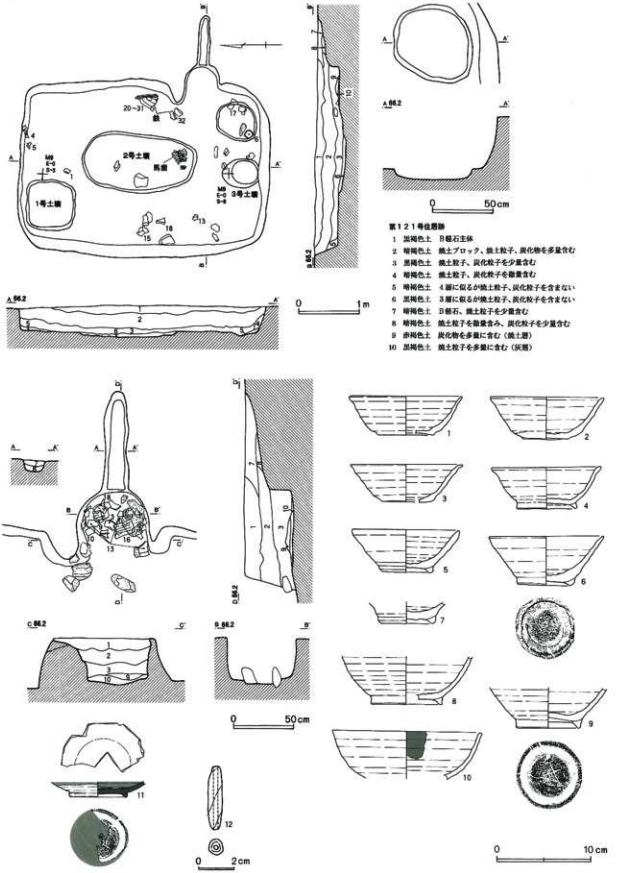
カマドは、東壁中央で検出した。右袖は地山を掘り残して造り、左袖は住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」カマドであった。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第119号住居跡より新しかった。

6は、須恵器（ＨＳ）の椀である。7は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。7は、口縁部が欠損している。7は、高台外面に黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。7は、内面のみ黒色処理が施されている。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第120号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

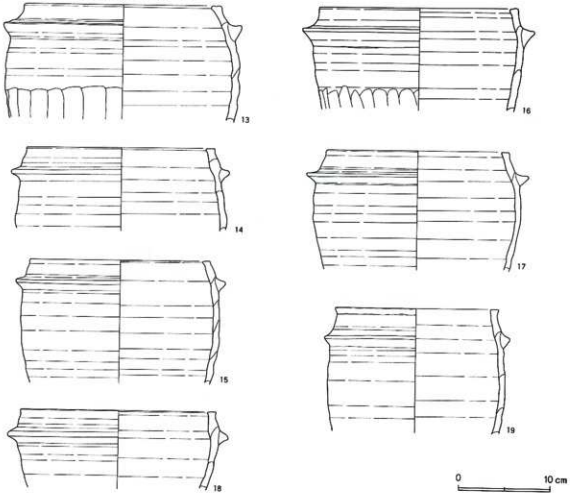
第210図　第121号住居跡・出土遺物（1）



第121号住居跡

1　黒褐色土　B軽石主体
2　暗褐色土　焼土ブロック、焼土粒子、炭化物を多量含む
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
5　暗褐色土　4層に似るが焼土粒子、炭化粒子を含まない
6　黒褐色土　3層に似るが焼土粒子、炭化粒子を含まない
7　暗褐色土　B軽石、焼土粒子を少量含む
8　暗褐色土　焼土粒子を微量含み、炭化粒子を少量含む
9　赤褐色土　炭化物を多量に含む（焼土層）
10　黒褐色土　焼土粒子を多量に含む（炭層）

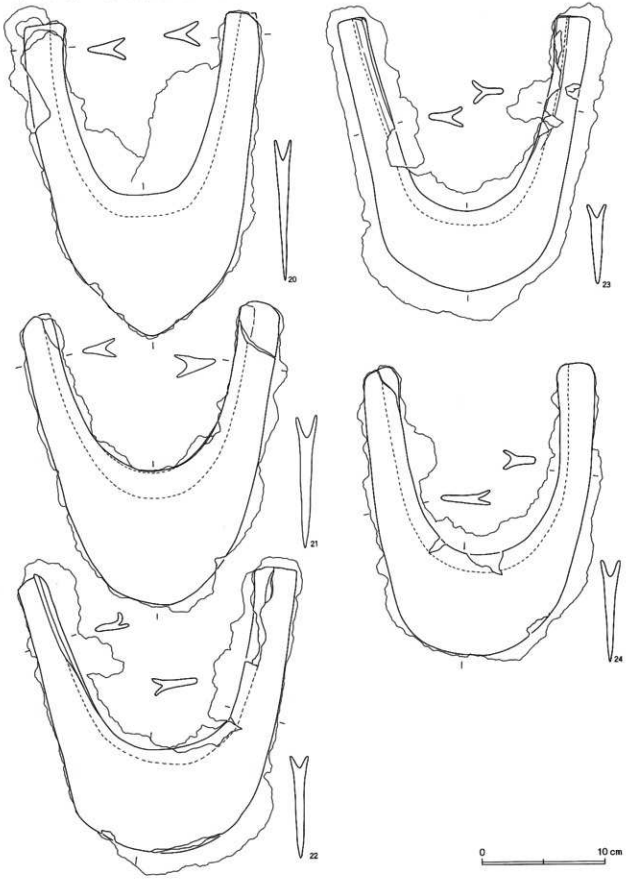
第211図　第121号住居跡出土遺物（2）



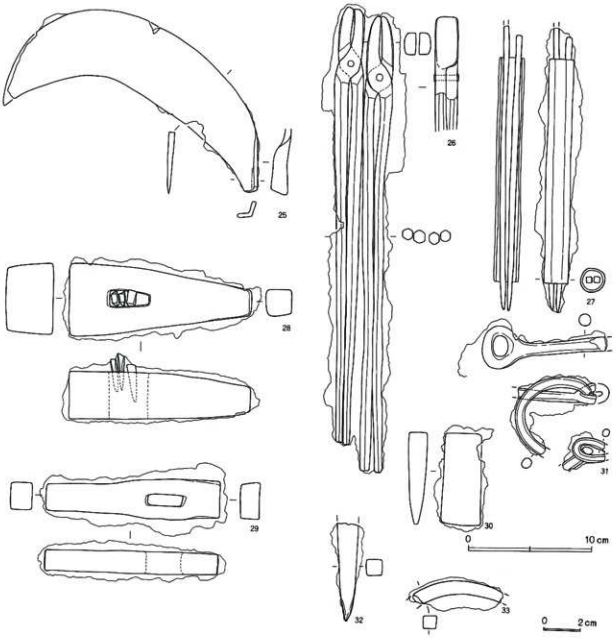
第177表　第121号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輔輪	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.9	4.1		5.9	B, E	良好	L	灰黄褐	30	
2	椀	NS	11.9	4.4		4.7	B, E, I	良好	L	灰白	60	
3	椀	HS	11.8	4.0		5.4	B, E	良好	R	にぶい橙	40	
4	高台付椀	HS	11.5	4.4		5.9	B, E, I	普通	L	灰	100	
5	高台付椀	NS	11.1	4.4		4.9	B, C, E, I	良好	R	暗褐	100	
6	高台付椀	HS	12.0	5.2		5.4	B, C, D, E, I	良好	L	灰	100	
7	高台付椀	HS				5.6	B, E, I	良好	R	暗褐	100	
8	高台付大椀	HS				7.4	A, B, C, D, E	良好	L	外－灰褐。内－明褐	40	
9	高台付椀	HS				6.3	B, E, G, I	普通	L	にぶい橙	60	カマド。ヘラ書き「×」
10	高台付椀	HS	15.7				B, E, I	良好	L	にぶい橙	10	カマド
11	高台付皿	K				5.9		良好		乳白	30	転用硯
13	羽BⅡa	HS	20.9		2.1		A, B, C, D, G, I	良好		明褐	25	カマド
14	羽BⅡb	HS	20.0		2.6		A, B, D, F, G, I	良好		明褐	20	
15	羽AⅡロ	HS	19.4		2.3		A, B, C, D, I	良好		明褐	25	
16	羽AⅠbロ	NS	21.3		2.5		A, B, D, G, I	良好		灰褐	20	カマド
17	羽AⅠaロ	HS	19.4		2.2		A, B, D, G, I	良好		明褐	25	
18	甑c	HS	21.0		2.8		A, B, D, G, I	良好		暗灰褐	20	
19	羽AⅠaロ	HS	17.6		3.1		A, B, C, D, I	良好		淡橙褐	25	カマド

第212図　第121号住居跡出土遺物（3）



第213図　第121号住居跡出土遺物（4）



第178表　第121号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	浅黄橙	100	3.4	0.9	0.2	1.9	C2	Ib	404	

第121号住居跡（第210図・第211図・第212図・第213図）

M－8・9グリッドで確認した。周辺の遺構が比較的疎らなため、覆土上面の火山灰をもとに、容易に確認できた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.98m・短辺0.28m・深さ0.45mであった。北西隅、中央、南壁中央の3ヶ所に土壙を検出した。1号土壙は、1辺0.75m・深さ0.06mの方形であった。2号土壙は、長径1.88m・短径0.91m・深さ0.04mの楕円形であった。3号土壙は、径0.58・深さ0.07mの円形であった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の南東隅に検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内へ短く伸びていた。燃焼部の掘り込みはみられず、底面は平らであった。燃焼部の中央には、川原石を使用した支脚が、並んで二カ所みられたことから、二つ掛けカマドと思われる。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は細長く、煙り出し部方向に緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は不整円形であった、規模は、径0.63m・深さ0.11mであった。

遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の杯（3）・高台付椀（9・10）・羽釜（13・16）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（6）・羽釜（17）が出土した。そのほか西壁の中央付近から羽釜（15・18）が、北壁よりから須恵器の高台付椀（4・5）が出土した。鉄製農耕具類（20～31）が、カマドの左脇から重なるように一塊となって出土したことは、特筆できよう。さらに2号土壙の上面からは、馬の下顎が出土した。

1から3は、椀である。2は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。1・3は、底部が欠損している。

4から10は、高台付椀である。5は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。7・9は口縁部、8は口縁部と底部、10は底部と高台が欠損している。10は、内面口縁部から体部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

11は、灰釉陶器の高台付皿である。転用硯である。11は、口縁部が欠損している。

12は、土錘である。

13から19は、羽釜である。16は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。13から19は、胴部中位以下が欠損している。

20から33は、鉄製品である。20から24は鋤先、25は鎌、26は鉗、27は棒状金具が入った鉄管で用途不明品、28、29は金槌、30は楔、31は馬具轡、32は釘の脚部、33は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第121号竪穴式住居跡を中堀III期に位置付けたい。

第122号住居跡（第214図・第215図）

L・M－10グリッドで確認した。周辺の遺構は比較的疎らであった。

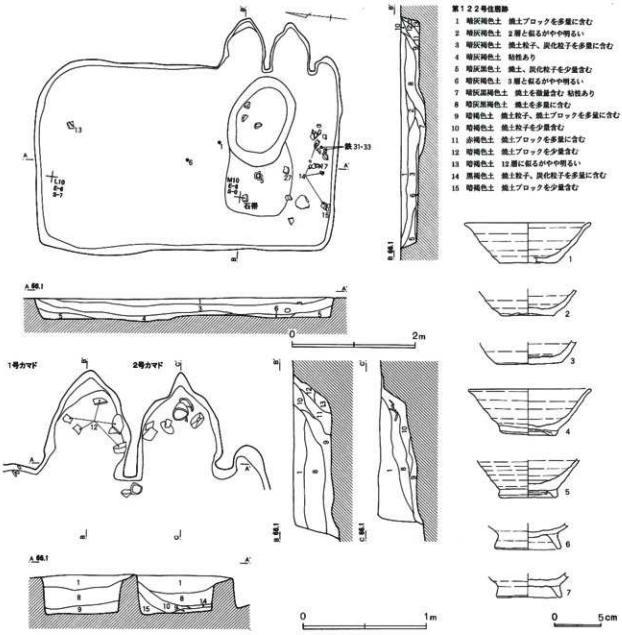
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.78m・短辺3.11m・深さ0.29mであった。カマドの前面には、楕円形の土壙を検出した。規模は、長径1.41m・短径0.97m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N－86°－Eであった。

第179表　第122号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	13.0	4.3		6.0	B, E, I	普通	L	灰白	30	
2	椀	NS				5.6	B, E, I	普通	R	灰白	20	
3	椀	HS				6.8	B, I	普通	L	灰白	10	
4	高台付椀	HS	12.8	4.8		5.1	B, E, I	普通	L	にぶい黄橙	95	2号カマド
5	高台付椀	NS				5.7	B, E, G	良好	L	灰白	100	底部
6	高台付椀	HS				6.5	B, E, I	良好	L	にぶい橙	20	
7	高台付椀	HS				6.6	B, E, G, I	普通	L	灰白	20	
8	高台付椀	NS				5.7	B, E, G, K	良好	R	灰	100	底部
9	高台付椀	K	16.3				D	良好		黄灰	20	口縁のみ
10	高台付椀	K	12.9				B	良好		暗灰	20	
11	高台付輪花椀	K					B	良好		灰	10	2号カマド
12	甕 Ⅳ d	H	19.5				B, C, D, E	良好		明赤褐	25	1号カマド
13	甑 A Ⅱ	NS	30.0				B, C, E, H	良好		灰	15	

第214図　第122号住居跡・出土遺物（1）



カマドは、東壁の南東寄りに並んで二基を検出した。埋土の堆積状況から、二基とも、住居跡の埋没まで使用していたと推定できる。

1号カマドは、当初から袖を造らなかったと推定した。2号カマドと共有する右袖は、地山を掘り残して造られていた。1号カマドの燃焼部底面には、小さな凹凸があるが、掘り込みは認められなかった。

2号カマドの右袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内へ伸びていた。燃焼部の底面は、小さな凹凸があり、煙道部方向に緩やかに傾斜していた。燃焼部

第180表　第122号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
28	浅黄橙	20	8.0			93.3	A	Ⅶ	9	

第215図　第122号住居跡出土遺物（2）

から煙道部には、段をもって移行していた。煙道部は削平されていて不明瞭だが、細長く伸びていたと推定できる。

遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より新しかった。

遺物は、1号カマド内から土師器の甕（12）が出土した。また、住居跡の南壁の中央付近から坩堝（14）・鋳型（15・17）・刀子（31・32）が出土し、中央やや西寄りに石製の丸鞆が出土した。

1から3は、椀である。2は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。4から8は、高台付椀である。5・8は、須恵器（NS）である。1は底部、2・3・5から8は口縁部が欠損している。

9から11は、灰釉陶器の高台付椀である。11は、口縁部に輪花がつく。9・10は、底部と高台が欠損している。11は、口縁部破片である。

12は、土師器の甕である。12は、胴部下位以下が欠損している。

13は、須恵器（NS）の甑である。13は、胴部中位以下が欠損している。

14は、トリベである。15から26は、鋳型である。

27は、羽口である。

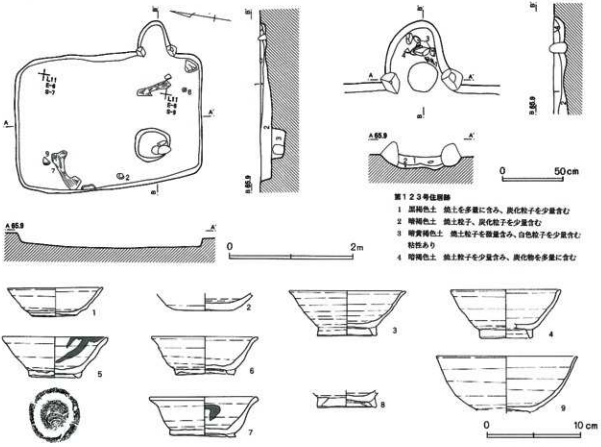
28は、土錘である。

29は、石製腰帯具（石帯）の丸鞆である。

30から38は、鉄製品である。30は鋳鉄製品、31は延板状鉄製品、32は刀子（刃部）、33は延板状鉄製品、34は板状鉄製品（不明）、35は釘状鉄製品、36・37は角棒状鉄製品、38は球状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第122号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第216図　第123号住居跡・出土遺物



第123号住居跡（第216図）

L－11グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであり、確認は容易であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.95m・短辺2.12、深さ0.17mであった。住居跡の西寄りに、円形の土壙を検出した。規模は、径0.57m・深さ0.11mであった。またカマド前面と北西隅付近に炭化材が出土したことから、いわゆる焼失住居と推定した。

主軸方位は、N－82°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は当初から造られなかったと判断した。焚き口部の両側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部のやや奥に、支脚として使用された川原石が出土した。このことから、一つ掛けカマドであったと推定される。燃焼部の底面には、小さな凹凸がみられた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、住居跡の北西隅付近から、須恵器の高台付椀（7・9）が出土し、カマドの右前から須恵器の高台付椀（8）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の椀である。3から9までは、須恵器（HS）の高台付椀である。2は口縁部、4は底部、9は高台が欠損している。8は、底部のみである。5は内面口縁部から体部にかけて、7は内面体部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

以上、出土遺物から第123号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第124号住居跡（第217図）

M－7・8グリッドで確認した。周辺は溝・土壙・小穴などが密集し、確認に手間取った。

住跡の西半分は第17号区画溝が破壊したため、不明な点が多かった。住居跡の形状は、長方形と推定され、残存した東壁は、長さ4.50m・深さ0.38mであった。北壁は、緩く傾斜しながら立ち上っていた。

主軸方位は、N－1°－Eであった。

住居跡の床面に、不整円形の小穴を、まとまって四基検出した。P1は、長径0.62m・深さ0.41mで底面から二個の川原石が出土した。P2は、長径0.81m・深さ0.12m。P3は、径0.41m・深さ0.16m。P4は、0.54m・深さ0.09mであった。いずれの小穴も覆土中に多量の焼土、炭化物が含まれていた。

また、床面に第12号鍛冶炉を検出した。（第Ⅳ章（3）鍛冶炉跡参照）。形状は不整楕円形で、規模は0.55m・深さ0.12mであった。

遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より古かった。

1・2は、土師器の坏である。1は坏AⅤ、2は坏AⅥである。

3は、須恵器（S）の高台付椀である。3は、口縁部が欠損している。

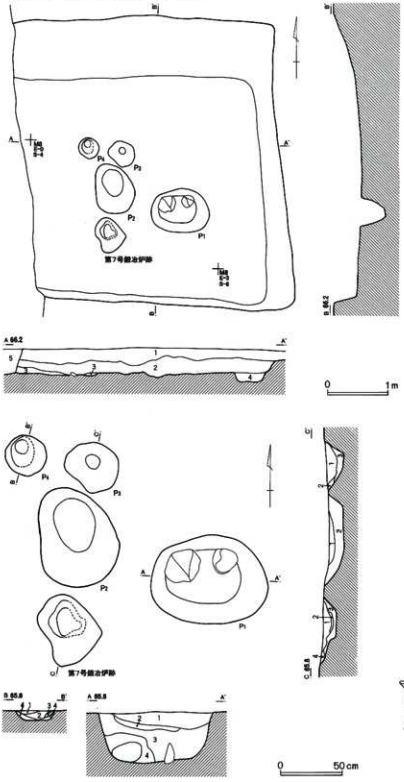
4・5は、土師器の甕である。4・5は、口縁部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第124号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第181表　第123号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.1	3.0		4.9	B, E, I	普通	L	橙	80	カマド
2	椀	HS				5.8	B, C, D, E, K	良好	R	明赤褐	80	
3	高台付椀	HS	12.1	4.8		6.2	B, C, E	普通	L	灰黄	80	カマド
4	高台付椀	HS	11.7	5.2		5.2	B, E, I	普通	L	橙	20	カマド
5	高台付椀	HS	11.1	4.3		4.9	B, E, I	普通	L	浅黄橙	80	
6	高台付椀	HS	11.1	4.0		6.1	B	普通	L	灰白	95	
7	高台付椀	HS	11.3	4.2		6.8	A, B, C, D, E	良好	R	明赤褐	100	
8	高台付椀	HS				6.1	E, I	普通	R	黄橙	10	底部のみ
9	高台付椀	HS	14.8				E, I	普通	L	橙	70	

第217図　第124号住居跡・出土遺物



第１２４号住居跡

1　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化物を少量含む
2　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含む
3　褐色土　焼土粒子、炭化物を少量含む

第７号掘立柱跡

1　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
2　灰色土　還元化面
3　暗赤褐色土　焼土層
4　褐色土　炭化物を少量含む

P-1

1　にぶい黄褐色土　焼土、炭化物、黄褐ブロックを少量含む
2　黄褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
4　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化粒子を少量含む

P-2

1　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化物を微量含む
2　黒褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む

P-3

1　にぶい黄褐色土　焼土粒子を少量含み、炭化物を多量に含む
2　暗赤褐色土　焼土層
3　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む

P-4

1　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
2　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
3　灰色土　還元化面
4　暗赤褐色土　焼土層

第182表　第124号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	11.8	3.1		8.3	B, E	普通		黄橙	70	
2	坏 A VI	H	11.9	3.4		8.2	B, D, E	普通		黄橙	50	
3	高台付椀	S				8.4	B, E	良好		灰	20	
4	甕 B	H	19.1				B, E	普通		橙	20	
5	甕 B	H	21.2				B, E	良好		にぶい橙	20	

第125号住居跡（第218図）

N－7・8グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙などが比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.66m・短辺2.97m・深さ0.29mであった。

住居跡の三基の土壙を検出した。1号土壙は、不整楕円形で規模は、長径1.03m・深さ0.11mであった。2号土壙は、不整楕円形で規模は、長径0.96、深さ0.04mであった。3号土壙は、円形で径0.56m・深さ0.08mであった。また住居の南西隅から径0.2m・深さ0.12mの小穴を検出した。なお、住居跡の中央から炭化物が集中して出土した。

主軸方位は、N－91°－Eであった。

カマドは、東壁の南東隅に二基検出した。2号カマドから1号カマドへ作り替えたと判断した。

1号カマドは、袖を検出できなかった。また埋土の状況から、焚き口部の左側に、補強材の抜取り痕跡である円形の窪みがみられることから、袖は造らなかったと推定した。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の極く浅い掘り込みを検出した。燃焼部から煙道部には、小さな段をもって移行していた。煙道部は削平されていたが、細長く伸びていたと推定した。

1号カマドの右袖下から、楕円形に浅く掘り込まれた燃焼部を検出したことで2号カマドは確認できた。

貯蔵穴は、2号カマドの右脇の住居跡の南東隅に検出した。形状は、楕円形であった。規模は、長径0.49m・深さ0.08mと小形であった。

遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より古く、第12号区画溝より新しかった。

1・2は、須恵器（NS）の高台付椀である。2は、口縁部が欠損している。

3は、灰釉陶器の段皿である。4は、須恵器（NS）の長頸壺である。3は口縁部破片、4は頸部のみである。

5は、須恵器（S）の凸帯付四耳壺である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第125号竪穴式住居跡を中堀III期に位置付けたい。

第126号住居跡（第219図）

N・O－7・8グリッドで確認した。住居跡の大半が、第127号住居跡・第12号区画溝と重複し、確認に手間取った。

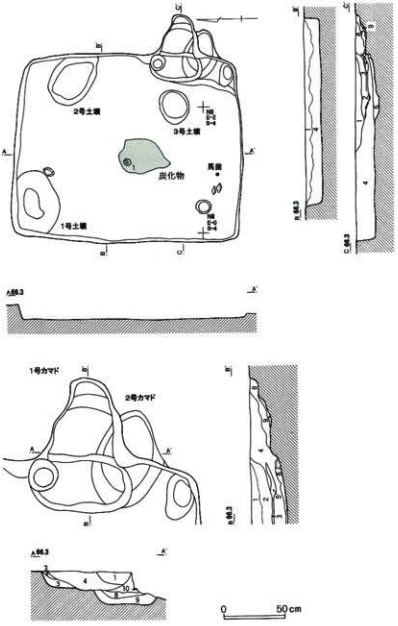
第127号住居跡に東半分が破壊され、全容は不明であった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.80m・短辺1.47m・深さ0.49mであった。住居跡の南西

第183表　第125号住居跡出土遺物観察表

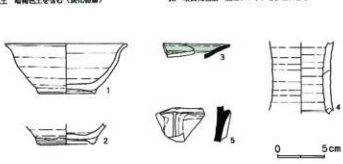
番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	12.9	5.3		5.8	B, E, I	普通	L	灰白	100	
2	高台付椀	NS				5.7	E, I	良好	L	にぶい橙	20	
3	段皿	K					D	良好		淡緑灰	5	破片
4	長頸壺	NS					B, H	良好		灰	25	頸部のみ
5	凸帯付四耳壺	S					B, D	良好		暗灰褐	5	破片

第218図　第125号住居跡・出土遺物



第125号住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、白色粒子を少量含む
2　暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、白色粒子を微量含む
3　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、炭化粒子を多量に含む
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
5　黒色土　暗褐色土を含む（炭化物層）
6　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、炭化粒子を多量に含む
7　暗褐色土　焼土粒子を多量に含む
8　暗赤褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子を多量に含む
9　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
10　暗黄褐色土　焼土ブロックを多量に含む



部とカマドの左袖の前面に二基の土壙を検出した。1号土壙は、楕円形で長径1.05m・短径0.91m・深さ0.13mであった。2号土壙は、不整楕円形で長径1.16m・短径0.73m・深さ0.17mであった。

主軸方位は、N－3°－Wであった。

カマドは、北壁の中央で検出した。右袖は、第127号住居跡に破壊されていた。左袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内へ短く延びていた。燃焼部は幅が狭く、浅く窪んでいた。焚き口部と推定した部分に、径0.47m・深さ0.31mの円形の掘り込みを検出した。

遺構の切り合い・関係は、第127号住居跡より古く、第12号区画溝より新しかった。

遺物は、第1号土壙から須恵器の高台付椀（3）が出土した。

1は、土師器の坏AVである。1は、底部が欠損している。

2・3は、須恵器（HS）の高台付椀である。2は底部、3は口縁部と底部が欠損している。

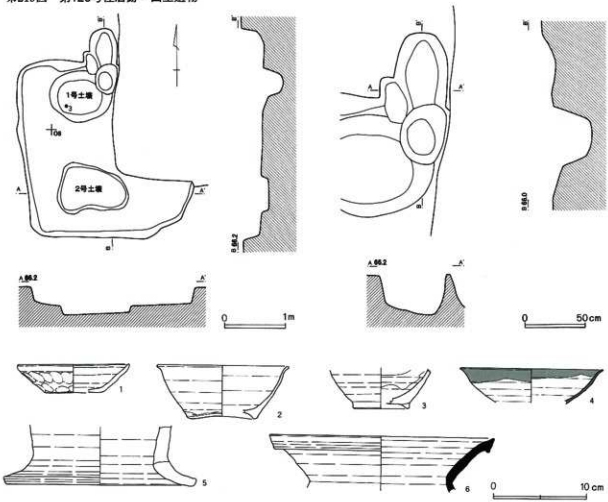
4は、灰釉陶器の高台付椀である。4は底部と高台が欠損している。

5は、須恵器（NS）の甑である。5は、底部のみである。

6は、須恵器（S）の甕である。6は、口縁部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第126号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第219図　第126号住居跡・出土遺物



第127号住居跡（第220図）

N・O－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・土壙などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.62m・短辺2.82m・深さ0.33mであった。住居跡の北西部に二基の土壙を検出した。1号土壙は、長径1.05m・短径0.5m・深さ0.12mの楕円形で、小穴2基がみられた。入り口施設であろうか。2号土壙は、径0.48m・深さ0.12mであった。カマドの左脇からも径0.21m・深さ0.11mの小穴を検出した。

主軸方位は、N－1°－Wであった。

カマドは、北壁のやや西寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られていた。左袖は、長く住居跡内へ延びていたが、右袖は、幅広く短かかった。燃焼部は、住居跡内に全体が造られていた。底面は、不整形に浅く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部には、段はもたずに急傾斜で移行していた。

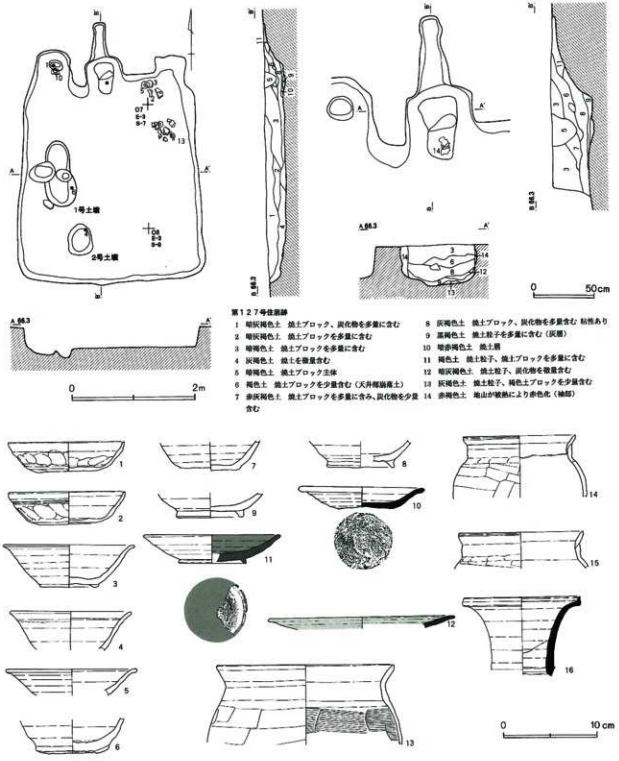
遺構の切り合い関係は、第126号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（14）が出土し、カマド左脇の小穴から土師器の坏（1）・須恵器の皿（10）が、住居跡の北東部から土師器の坏（2）・須恵器の高台付椀（3・5）・土師器の甕（13）が出土した。

1・2は、土師器の坏である。1は、坏AⅤである。2は、坏AⅥである。

3から9は、高台付椀である。5・6は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。4・5は底部と高台、6・7・9は口縁部、8は口縁部と底部が欠損している。

第220図　第127号住居跡・出土遺物



第127号住居跡

1　暗灰褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量に含む
2　暗灰褐色土　焼土ブロックを多量に含む
3　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む
4　灰褐色土　焼土を微量含む
5　暗褐色土　焼土ブロック主体
6　褐色土　焼土ブロックを少量含む（天井崩落土）
7　赤灰褐色土　焼土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む
8　灰褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量含む 粘性あり
9　黒褐色土　焼土粒子を多量に含む（灰層）
10　暗赤褐色土　焼土層
11　褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む
12　暗灰褐色土　焼土粒子、炭化物を微量含む
13　灰褐色土　焼土粒子、褐色土ブロックを少量含む
14　赤褐色土　地山が被熱により赤色化（被熱）

10は、須恵器（S）の皿である。

11・12は、灰釉陶器の高台付皿である。11は底部、12は底部と高台が欠損している。

13から15は、土師器の甕である。13・14は胴部中位以下、15は胴部上位以下が欠損している。

16は、須恵器（S）の長頸壺である。16は、口縁部と頸部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第127号竪

第184表　第126号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	11.7	3.0		6.0	B, E, H	普通		暗褐	20	
2	高台付椀	H S	13.8	5.7		6.8	B, I	普通	L	にぶい黄橙	40	
3	高台付椀	H S				5.6	B, E, H	良好	L	外－灰白。内－暗褐	100	
4	高台付椀	K	14.9				D	良好		灰	10	
5	甑	N S				19.7	B, E, H	良好		灰褐	20	
6	甕	S	23.6				B, G, K	良好		青灰褐	20	

第185表　第127号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	12.2	3.2		6.3	B, E, F	不良		明橙	100	
2	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.5		7.6	B, E	普通		やや暗い橙	60	カマド
3	高台付椀	H S	13.6	4.5		5.6	B, C, F, I, K	良好	R	明褐	60	カマド
4	高台付椀	H S	12.8				D, I	良好	R	明茶褐	25	
5	高台付椀	N S	13.6				B, C, D, I	良好	R	黒褐	25	カマド
6	高台付椀	N S					B, D, I	良好	L	灰	80	底部
7	高台付椀	H S					B, F	良好	R	灰	25	
8	高台付椀	H S				7.0	C, D, E	良好	L	明赤褐	40	
9	高台付椀	H S				6.6	B, C, I	良好	R	外－明赤褐。内－黒	50	
10	皿	S	12.8	2.3		6.2	B, C, G, K	良好	R	灰褐	80	
11	高台付皿	K	14.0	3.0		7.1	B, D	良好		淡灰	20	
12	高台付皿	K	19.2				B, D	良好		淡灰	10	
13	甕 B Ⅲ a	H	18.7				B, E	良好		明褐	20	
14	台付甕	H	11.8				B, C, D, E	良好		明褐	30	カマド
15	台付甕	H	13.1				B, C, D, I	良好		明褐	15	
16	長頸壺	S	12.2				D, F	普通		青灰	15	

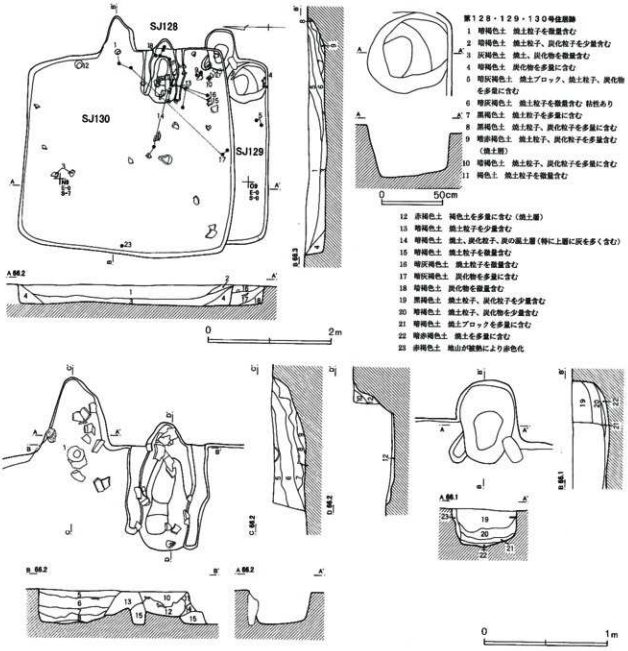
第186表　第128号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B Ⅱ 砂	H	12.8	4.5		4.6	B, E, G	不良		くすんだ橙	100	
2	椀	H S	13.7	4.1		6.9	B, I	普通	L	にぶい黄橙	30	
3	椀	N S	11.7	4.5		6.0	B, C, F, I	良好	L	灰	90	
4	高台付椀	N S	14.2	5.6		5.0	B, E, I	普通	R	灰白	85	
5	高台付椀	H S	13.4	5.3		5.5	B, I	普通	L	淡黄	50	
6	高台付椀	H S	13.6	5.2		6.0	E, I	普通	L	褐灰	40	
7	高台付椀	N S				5.2	B, I	普通	L	灰白	60	
8	台付甕	H	13.8				B, C, D, E	良好		明赤褐	25	
9	台付甕	H	14.7				B, E, F	不良		明橙	10	口縁のみ

第187表　第129号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
10	長頸壺	S				8.5	B	良好	L	灰	5	
11	坏 A Ⅵ	H	11.8	4.0		6.0	B, E, F	良好		明橙	100	
12	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.8		5.5	F, G	普通		暗茶褐	30	カマド
13	甕 B Ⅲ c	H	20.1				B, F, I	普通		くすんだ橙	30	カマド

第221図　第128・129・130号住居跡



穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第128号住居跡（第221図・第222図）

N・O－8・9グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らだったが、三軒の住居跡が重複し、第130号住居跡の覆土除去作業中にカマドだけを確認した。

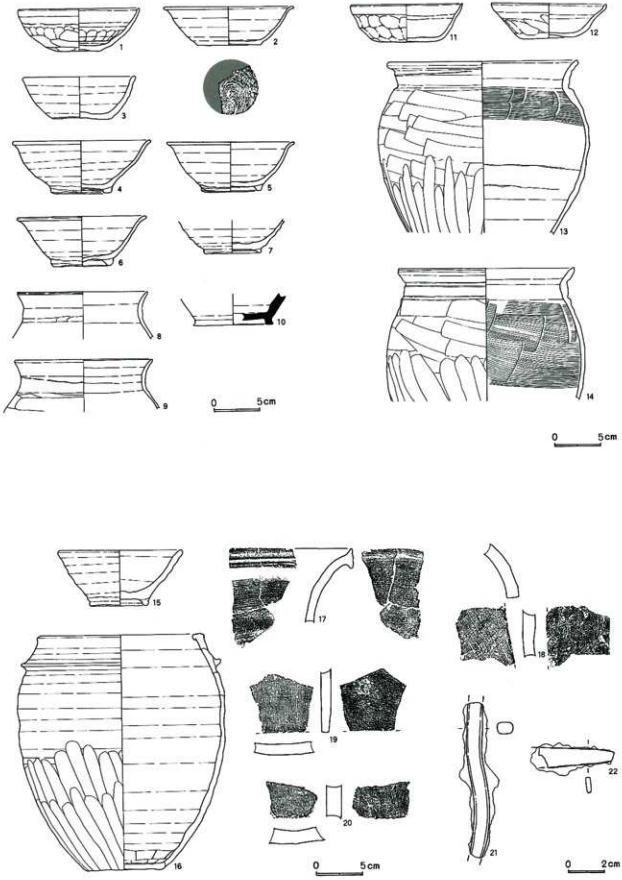
住居跡の形状・規模・主軸方位などは不明であった。

カマドは、東壁に構築されたと推定した。袖は、暗褐色土で造り付けられ、住居跡内に長く延びていた。燃焼部全体は、住居跡内に造られていた。燃焼部底面には、不整楕円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部には、段をもって移行していたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第129・130号住居跡より古かった。

1は、土師器の坏BⅡである。

第222図　第128・129・130号住居跡出土遺物



2・3は、椀である。2は須恵器（HS）、3は須恵器（NS）である。

4から7は、高台付椀である。4・7が、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。7は、口縁部が欠損している。

8・9が、土師器の甕である。8・9は、胴部上位以下が欠損している。

10は、須恵器（S）の長頸壺である。10は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第128号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第129号住居跡（第221図・第222図）

O－8・9グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らだったが、三軒の住居跡が重複していたため確認に手間取った。

住居跡は、大半が第130号住居跡により破壊されていたため、不明な点が多かった。残存した南壁は、長さ2.92m・深さ0.33mであった。

主軸方位は、N－90°－Eと推定した。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、当初から造られていと判断した。焚き口部の右側は、川原石を構築材としていた。第130号住居跡が破壊した、焚き口部の左側には、補強材の抜き取り痕跡を検出した。燃焼部は、極く浅く窪んでいた。

貯蔵穴は、住居跡の南東隅で検出した。形状は、不整円形であった。規模は、径0.67m・深さ0.41mであった。

遺構の切り合い関係は、第130号住居跡より古く、第128号住居跡より新しかった。

遺物は、貯蔵穴の周辺から須恵器の高台付椀（4・5）が出土した。

11・12は、土師器の坏AⅥである。

13・14は、土師器の甕である。13・14は胴部下位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第129号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第130号住居跡（第221図・第222図）

N・O－8・9グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らだったが、三軒の住居跡が重複したため確認に手間取った。

住居の形状は、方形であった。規模は、長辺3.42m・短辺3.25m・深さ0.28mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。左袖は検出されず、右袖は第128号住居跡のカマド左袖の上に、さらに暗褐色土を盛って造られていたと判断した。焚き口部の左側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みは、みられなかった。燃焼部から煙道部へは、緩やかに傾斜して移行していた。

遺構の切り合い関係は、第128・129号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（1）が出土し、住居跡の南東部から土師器の甕（9・13・14）・羽釜（16）須恵器の長頸瓶（10）が、またカマド左脇から土師器の坏（12）が出土した。

15は、須恵器（HS）の高台付椀である。

16は、須恵器（HS）の羽釜である。

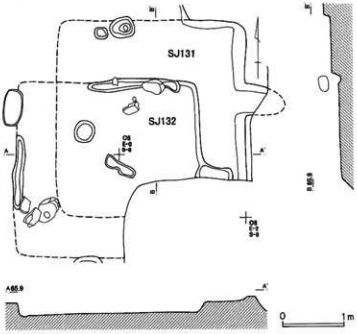
17は、須恵器（HS）の大甕である。17は、口縁部破片である。

18は、丸瓦である。19・20は、平瓦である。

第188表　第130号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	様別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軟質	色調	残存	出土位置その他
14	甕 B Ⅲ a	H	18.8				B, E, F, G			暗茶褐	20	カマド
15	高台付椀	HS	12.9	5.8		5.9	B, E, I	良好	R	灰褐	100	
16	羽 B Ⅱ a	HS	17.3	24.8	2.8	8.1	A, B, C, E, G, I	良好		灰白	60	
17	大甕口縁	HS					B, D	良好		明赤褐		カマド

第223図　第131・132号住居跡



21は、棒状鉄製品である。22は、刀子茎部である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第130号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第131号住居跡（第223図）

O－7・8グリッドで確認した。第12号区画溝の覆土除去作業中に、区画溝の底面が東側に曲がるようになったため、精査したところ竪穴式住居跡であることを確認した。そのため住居跡の大部分は破壊されてしまい、不明な点が多かった。

住居跡の形状は、方形と推定した。規模は、長辺4.02m・短辺4.12mであった。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

カマドは、東壁に造られていたが、攪乱のため痕跡だけを検出した。

遺構の切り合い関係は、第132号住居跡より古く、第12号区画溝より新しいと判断した。

図示できるほどの遺物は、出土していない。

以上、遺構の重複関係から第131号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第132号住居跡（第223図）

O－7・8グリッドで確認した。第12号区画溝の覆土除去作業中に、区画溝底面に壁溝を検出し、住居跡と確認した。そのため住居跡の大部分は破壊してしまったため不明な点が多い。

住居跡の形状は、長方形と推定した。規模は、長辺3.97m・短辺2.78mであった。北壁と西壁の一部に幅0.22mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－91°－Eであった。

カマドは、東壁に造られていたが、攪乱でほとんどを破壊され、燃焼部底面の掘り込みだけを検出した。

遺構の切り合い関係は、第131号住居跡、第12号区画溝より新しかった。

図示できるほどの遺物は、出土していない。

以上、遺構の重複関係から第132号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第133号住居跡（第224図）

N－11グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.49m・短辺2.47m・深さ0.34mであった。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、東壁中央で検出した。ただし、第134号住居跡が破壊していたため、構造は不明であった。

遺構の切り合い関係は、第134号住居跡より古かった。

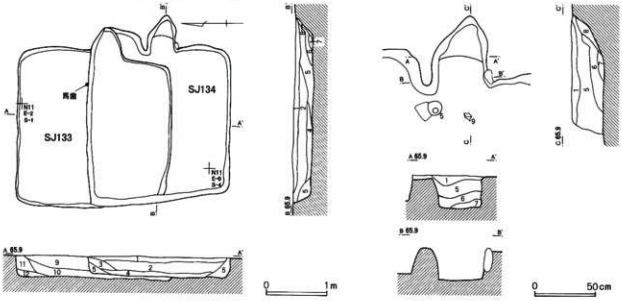
遺物は、住居中央やや東寄りから馬の歯が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の高台付椀である。1・

第189表　第130号住居跡出土瓦観察表

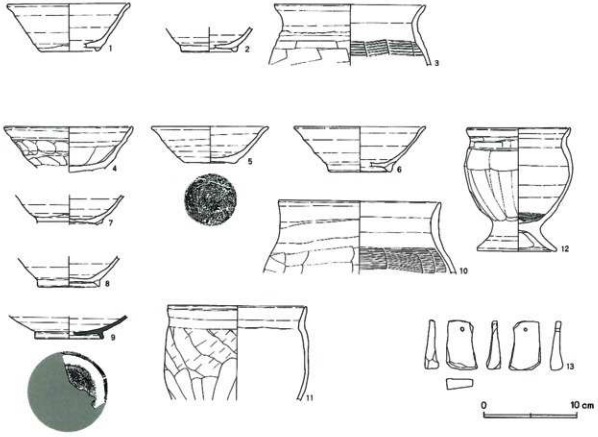
番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
18	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
19	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
20	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

第224図　第133・134号住居跡・出土遺物



第133・134号住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
3　黄褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
4　黒褐色土　焼土粒子を多量に含む
5　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
6　暗褐色土　焼土粒子を少量含む
7　暗褐色土　6層に似るが中や明るい
8　褐色土　焼土粒子を微量含む
9　暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化物を少量含む
10　褐色土　焼土ブロックを多量に含む
11　茶褐色土　焼土を少量含む
12　黒褐色土　粘性あり



2は、口縁部と底部が欠損している。

3は、土師器の甕である。3は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第133号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第134号住居跡（第224図）

N－11グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、不整方形であった。規模は、長辺2.73m・短辺2.29m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

カマドは、東壁中央で検出した。左袖は、地山を掘り残して造られ、右袖は、住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」カマドであった。焚き口部右側は、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部奥から煙道部にかけては、緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第133号住居跡より新しかった。

遺物は、カマドの前面から須恵器の坏（5）・灰釉陶器の高台付皿（9）が出土した。

4は、土師器の高台付坏BⅣである。4は、高台が欠損している。

5は、須恵器の椀である。

6から8は、須恵器（HS）の高台付椀である。6は底部、7・8は口縁部が欠損している。

9は、灰釉陶器の高台付椀である。9は、口縁部と底部が欠損している。

10から12は、土師器の甕である。10は胴部上位以下、11は胴部下位以下が欠損している。

13は、砥石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第134号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第135号住居跡（第225図）

N－11グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺3.18m・短辺1.90m・深さ0.50mであった。

主軸方位は、N－84°－Eであった。

カマドは、東壁やや北寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。燃焼部全体が住居跡内に造られ、底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部には、段をもたずに緩やかに傾斜しながら移行していた。煙道部は、長さ1.05

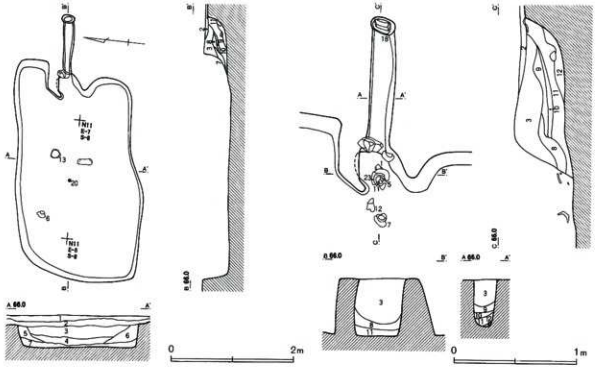
第190表　第133号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	12.8	5.0		5.7	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
2	高台付椀	HS				5.5	B, E, I	普通	R	浅黄橙	5	
3	甕BⅢa	H	15.8				E, I	普通		橙	5	口縁部のみ

第191表　第134号住居跡出土遺物観察表

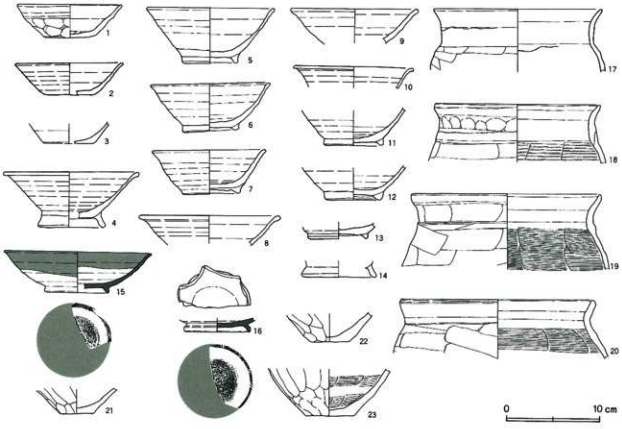
番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
4	高台付坏BⅣ	H	13.5				B, E	普通		黄橙		
5	椀	HS	12.2	3.8		5.5	B, C, E, I	普通	L	灰褐	100	
6	高台付椀	HS	14.0	4.8		6.2	B, E	普通	L	にぶい黄橙	20	
7	高台付椀	HS					B, E	普通	L	灰黄	40	
8	高台付椀	HS				6.3	B, E	普通	L	褐灰	30	
9	高台付椀	K				6.9	D	良好		淡灰	20	
10	甕AⅢd	H	17.0				B, D, E, H	普通		茶褐	10	口縁部のみ
11	台付甕	H	14.6				B, E	普通		くすんだ茶	20	
12	台付甕	H	10.8	13.0		8.3	B, E	普通		暗茶褐	50	

第225図　第135号住居跡・出土遺物



第135号住居跡

1　黒褐色土　Ⅱ軽石を含む
2　暗褐色土　焼土粒子、白色粒子を少量含む
3　灰褐色土　焼土ブロック、炭化物を含む
4　灰茶褐色土　焼土を含む
5　暗灰褐色土　粘性あり
6　暗灰褐色土　焼土粒子を微量含む
7　暗灰褐色土　焼土を少量含む　粘性あり
8　黄褐色土　焼土粒子を含む（天井部崩落土）
9　黒褐色土　焼土粒子を含む
10　暗赤褐色土　赤褐色粒子を含む（焼土層）
11　黒褐色土　焼土粒子、褐色粒子を含む
12　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む



mと細長く、煙り出し部は、急な傾斜で立ち上がっていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（1）・須恵器の高台付椀（5・7・11・12）・土師器の甕（23）が出土し、住居跡の中央やや北寄りから須恵器の高台付椀（6・13）・土師器の甕（20）が出土した。

1は、土師器の坏BⅡである。

2・3は、須恵器（HS）の椀である。2は底部、3は口縁部と底部が欠損している。

4は、須恵器（NS）の高脚高台付椀である。5から14は、高台付椀である。6・10は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。4は底部、8・9・10は底部と高台、11・12は口縁部が欠損している。13は底部のみ、14は高台のみである。

15・16は、灰釉陶器の高台付椀である。15は、底部が欠損している。16は、底部のみである。

17から23は、土師器の甕である。17から20は、胴部上位以下が欠損している。21から23は、底部のみである。

以上、出土遺物から第135号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第136号住居跡（第226図・第227図）

N－10グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.07m・短辺2.25m・深さ0.17mであった。南壁の中央に、長径0.53m・深さ0.21mの小穴を検出した。入り口部の施設と推定した。

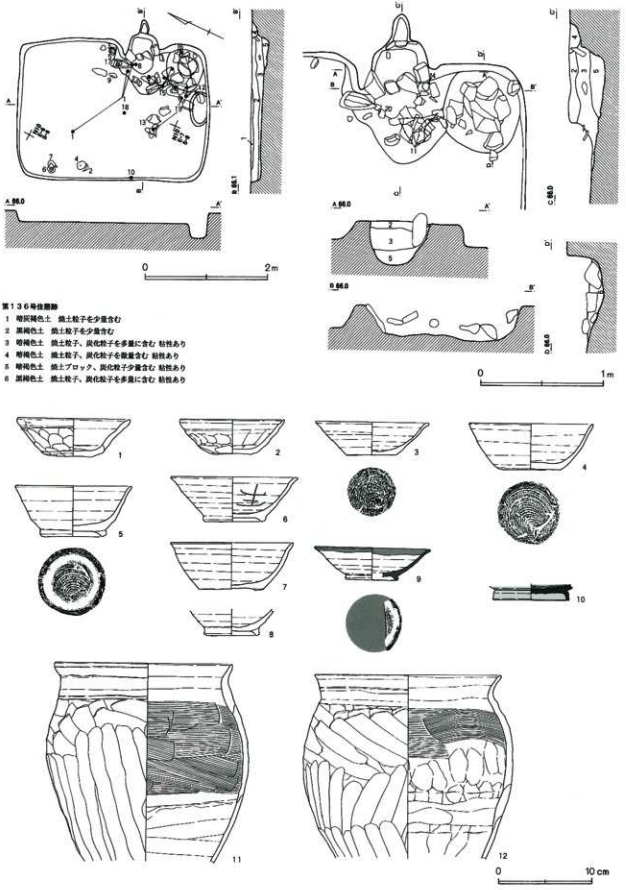
主軸方位は、N－68°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地

第192表　第135号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B Ⅱ	H	10.9	3.5		5.4	E, F, G	不良		暗茶褐	100	カマド
2	椀	HS	11.4	3.3		5.2	B, C, G, I	良好	R	明褐	25	
3	椀	HS				5.2	B, E, G	良好	R	外－灰白。内－黒	25	
4	高脚高台付椀	NS	14.1	5.8		6.8	B, D	良好	L	灰褐	40	
5	高台付椀	HS	13.3	5.9		5.6	B, C, E	良好	R	明褐	40	カマド
6	高台付椀	NS	12.5	5.2		5.3	B, C, E	良好	L	黒	70	
7	高台付椀	HS	11.8	4.7		5.5	B, C, D, E, G, I	良好	R	明褐	90	カマド
8	椀	HS	14.4				B, D, G	良好	R	灰褐	25	
9	椀	HS	13.4				B, C, I	良好	R	外－明褐。内－黒	25	
10	椀	NS	12.6				B, D, E	良好	R	灰白	20	
11	高台付椀	HS				5.8	B, C, E, G	良好	R	黒褐	100	カマド
12	高台付椀	HS				5.6	B, C, D, E, G	良好	L	外－明赤褐。内－明褐	60	カマド
13	高台付椀	HS				5.8	B, C, F, I	良好	R	外－明褐。内－黒	100	底部のみ
14	高台付椀	HS				7.6	B, D	良好		灰	40	
15	高台付椀	K	15.6	4.3		6.6	B	良好		灰	20	破片
16	高台付椀	K				6.8	B	良好		灰白	10	底部のみ
17	甕 B Ⅲ c	H	17.9				B, E, I	普通				
18	甕 B Ⅲ a	H	17.4				B, E, K	普通		淡橙	10	
19	甕 A Ⅲ c	H	20.0				B, E	不良		橙	10	口縁部のみ
20	甕 A Ⅲ c	H	20.2				B, E, K	普通		橙	10	口縁部のみ
21	甕	H				3.6	B, I	普通		外－にぶい褐。内－橙	5	底部のみ
22	甕	H				4.0	B, E, I	普通		橙	5	
23	甕	H				5.2	B, E	普通		濃橙	10	カマド

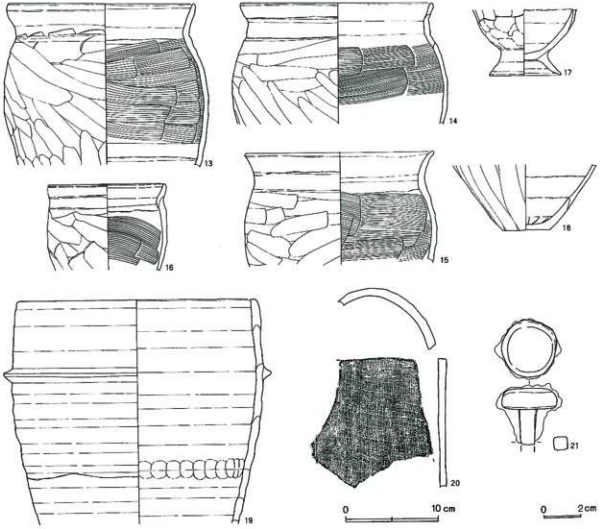
第226図　第136号住居跡・出土遺物（1）



第136号住居跡

1　暗灰褐色土　焼土粒子を少量含む
2　黒褐色土　焼土粒子を少量含む
3　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む　粘性あり
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む　粘性あり
5　暗褐色土　焼土ブロック、炭化粒子少量含む　粘性あり
6　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む　粘性あり

第227図　第136号住居跡出土遺物（2）



第193表　第136号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B Ⅳ	H	11.8	4.0		6.3	B, E, I	普通		暗茶褐	100	
2	坏 B Ⅱ	H	11.0	3.7		4.0	B, C, E	普通		暗橙	100	
3	椀	H S	11.7	3.5		5.2	B, E	普通	R	灰白	95	
4	椀	H S	13.1	4.9		6.5	B, E, I	普通	L	にぶい黄橙	100	
5	高台付椀	H S	12.3	5.4		6.3	B, C, H	良好	R	淡黄褐	100	
6	高台付椀	H S	13.3	4.9		6.1	B, C, E, F	不良	L	淡橙褐	100	刻書「生」
7	高台付椀	H S	12.8				B, E, H	良好	R	外－淡黄褐。内－黄灰	100	
8	高台付椀	N S				5.2	B, I	普通	L	灰白	10	
9	高台付椀	K	12.0	3.4		5.4	B, D	良好		灰	30	
10	高台付椀	M					B	良好		淡緑	20	
11	甕 A Ⅲ d	H	18.7				E, F, I	良好			50	
12	甕 A Ⅲ c	H	19.8				E, F, K	普通		暗茶褐	60	
13	甕 A Ⅲ c	H	20.0				B, E, I	良好		淡橙	50	
14	甕 B Ⅲ a	H	20.5				E, F	良好		にぶい橙	20	
15	甕 A Ⅲ b	H	20.0				E, F, I	良好		橙	10	

第194表　第136号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
16	台付甕	H	12.3				A, E, I	良好		こげ茶		
17	台付甕	H				7.7	B, E	普通		橙	10	脚部のみ
18	甕底部	H				5.0	B, E, F	普通		淡橙	10	底部のみ
19	甑 B Ⅱ	H S	25.6		7.6		A, E, G, I	良好		灰褐	20	

山を掘り残して造られ、住居内へと短く延びていた。両袖とも補強材として川原石が使用されていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、不整形に極く浅く窪まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。カマドから貯蔵穴にかけては、構築材であった大形の川原石がまとまって出土した。

貯蔵穴は、カマドの南東で検出した。形状は円形で、0.63m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド・貯蔵穴の周辺から土師器の坏（1）・須恵器の坏（3）・高台付椀（5・8）・灰釉陶器の高台付椀（9）・土師器の甕（11・12・14・16）・甑（19）・丸瓦（20）が出土し、住居跡の北西部から土師器の坏（2）・須恵器の坏（4）・高台付椀（6・7）・緑釉陶器の皿（10）が出土した。

1・2は、土師器の坏である。1は坏BⅣ、2は坏BⅡである。

3・4は、須恵器（HS）の椀である。5から8は、高台付椀が出土した。8が須恵器（NS）の他は、須恵器（HS）である。8は、口縁部が欠損している。

9は、灰釉陶器の高台付椀である。9は、底部が欠損している。

10は、緑釉陶器の高台付椀である。10は、底部のみである。

11から18は、土師器の甕である。19は、土師器の甑である。11から13・19は胴部下位以下、14から16は胴部中位以下が欠損している。17・18は、底部のみである。

第195表　第136号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
20	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り

20は、丸瓦である。

21は、鉄製の釘頭である。

以上、出土遺物から第136号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第137号住居跡（第228図・第229図）

N・O－10グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.70m・短辺2.60m・深さ0.54mであった。南壁を除いて幅0.25mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－75°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に非常に短く延びていた。燃焼部は、整った方形で、底面の掘り込みはみられず、奥に向かって緩やかに傾斜していた。燃焼部内から土師器の甕（11・12）が横並びに出土したことから、二つ掛けカマドと判断した。燃焼部と煙道部の境は、大きな段をもって移行していた。煙道部は、底部を残し大部分削平されていた。0.62mの細長い煙道と判断した。煙り出し部からは、土師器の甕（9）が出土した。補強材であろう。

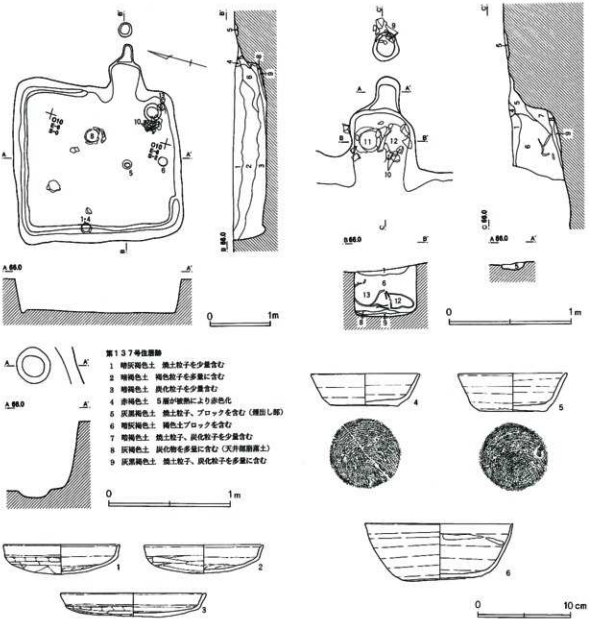
貯蔵穴は、カマド右脇南東隅から検出した。径0.27m・深さ0.06mと浅い小穴状である。

遺物は、貯蔵穴の周辺から土師器の坏（1）・甕（10）・瓦（13）が出土し、住居跡の中央から土師器の甕（8）が、住居跡の中央南寄りから須恵器の坏（5）・椀（6）が出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1・2は、土師器の坏Cである。3は、土師器の皿

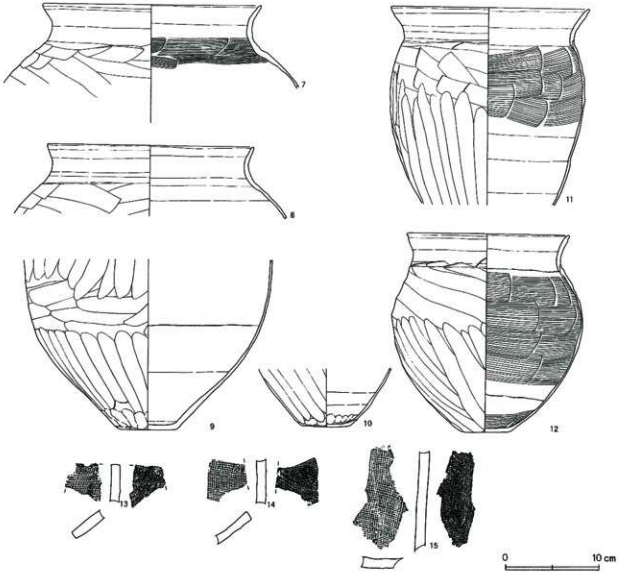
第228図　第137号住居跡・出土遺物（1）



第196表　第137号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏 C	H	12.4	3.1		9.3	B, E, H	良好		淡黄橙	100	
2	坏 C	H	12.7	3.0		9.2	B, E	普通		暗赤褐	100	
3	皿 A	H	15.5	2.6		11.0	B, D, E	普通		淡橙黄	80	カマド
4	椀	HS	11.5	3.4		7.2	B, E, H, K	良好	R	浅黄橙	80	
5	椀	HS	11.6	4.0		7.0	B, E, I	普通	L	淡黄	100	
6	大椀	NS	15.7	6.0		7.1	B, C, K	良好	R	灰白	60	
7	甕 A Ⅰ a	H	23.2				E, F, I	良好		橙	20	口縁部のみ
8	甕 A Ⅰ a	H	21.8				B, E	普通		くすんだ橙	10	カマド
9	甕	H				6.2	B, E, F	良好		明橙	30	
10	甕 底部	H				5.2	B, E, F	普通		暗茶褐	10	底部のみ
11	甕 A Ⅳ a	H	21.0				B, E, I	良好		暗橙	60	
12	甕 A Ⅰ a	H	17.1	20.9		5.0	E, F	良好		淡赤橙	80	カマド

第229図　第137号住居跡出土遺物（2）



である。4から6は、椀である。4・5は、須恵器（HS）である。6は、須恵器（NS）である。

7から12は、土師器の甕である。7・8は胴部上位以下、11は胴部下位以下が欠損している。9・10は、底部のみである。

13から15は、平瓦である。

以上、出土遺物から第137号竪穴式住居跡を中堀Ⅰ期に位置付けたい。

第197表　第137号住居跡出土瓦観察表

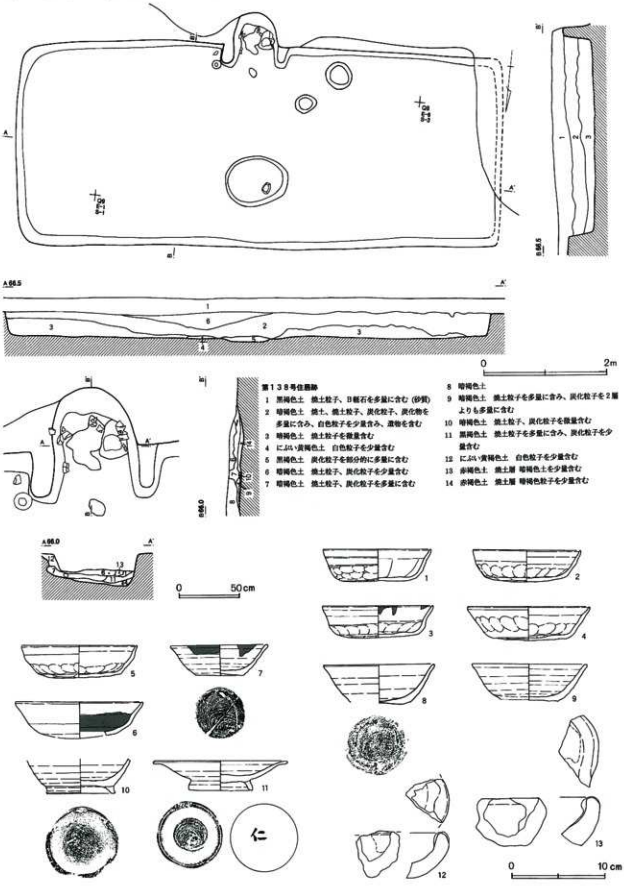
番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
13	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
14	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
15	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

第138号住居跡（第230図・第231図・第232図・第233図・第234図）

Q－8・9グリッドで確認した。周辺は小穴が多く、また砂利採取による攪乱が激しかったので、確認に手間取った。

住居跡の形状は、細長い長方形であった。規模は、長辺7.75m・短辺3.16m・深さ0.41mであった。住居跡の中央北寄りに、長径1.02m・深さ0.09mの楕円形の土壙を検出した。カマド右脇には、径0.43mと径0.37mの小穴二基を検出した。

第230図　第138号住居跡・出土遺物（1）



第138号住居跡

1　黒褐色土　焼土粒子、B軽石を多量に含む（砂質）
2　暗褐色土　焼土、焼土粒子、炭化粒子、炭化物を多量に含み、白色粒子を少量含み、遺物を含む
3　暗褐色土　焼土粒子を微量含む
4　にぶい黄褐色土　白色粒子を少量含む
5　黒褐色土　炭化粒子を部分的に多量に含む
6　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
7　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
8　暗褐色土
9　暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を2層よりも多量に含む
10　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
11　黒褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を少量含む
12　にぶい黄褐色土　白色粒子を少量含む
13　赤褐色土　焼土層　暗褐色土を少量含む
14　赤褐色土　焼土層　暗褐色粒子を少量含む

第198表　第138号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	脚	底径	胎　土	焼　成	軸線	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A　V	H	11.6	3.4		6.8	B, D, E			橙		
2	坏　A　Ⅵ	H	11.5	3.4		3.0	B, E	普　通		橙	100	
3	坏　A　Ⅵ	H	11.8	3.4		7.3	B, D, E	良　好		淡　橙	70	
4	坏　A　Ⅵ	H	12.9	3.5		7.8	B, E	良　好		黄　橙	60	
5	坏　A　Ⅵ	H	12.2	3.4		6.5	B, E	普　通		黄　橙	60	
6	坏　　A	H	13.4				B, E	普　通		黄　橙	20	
7	椀	HS	10.2	3.2		5.1	B, E	良　好		灰　黄　褐	90	
8	高台付椀	HS	11.7				B, D, E	良　好		灰　白	80	
9	高台付椀	HS	12.1				B, D	良　好		にぶい黄橙	80	
10	高台付椀	HS				7.2	B, D, E	良　好		にぶい橙	30	
11	高台付皿	HS	14.0	3.1		6.8	B, E	良　好		外－浅黄橙。内－淡黄褐	100	墨書「仁」

カマドは、南壁の中央で検出した。煙道部は撹乱によって破壊されていた。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に短く延びていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

鍛冶関連の遺物が多く、鍛冶工房だったと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1から6は、土師器の坏である。1は、坏AⅤである。2から5は、坏AⅥである。6は、坏Aである。6は、底部が欠損している。3は内面口縁部、6は内面体部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

7は、須恵器（HS）の椀である。8から10は、須恵器（HS）の高台付椀である。11は、須恵器（HS）の高台付皿である。底部外面に墨書「仁」が、みられる。8・9は高台、10は口縁部が欠損している。7は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。

12・13は、トリベである。

14から51は、円盤状土製品である。

52・53は、丸瓦である。54から57は、平瓦である。

第199表　第138号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼　成	凸　面	凹　面	側　面
50	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
51	丸瓦	中　間	刷り消し	布	1面面取り
52	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
53	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
54	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
55	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

58・59は、鉄製品である。58は角棒状鉄製品（両端欠失釘か？）、59は角棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第138号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第139号住居跡（第235図・第236図）

P－9グリッドで確認した。周辺は小穴が多く、また砂利採取による撹乱が激しかったので、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.55m・短辺3.53m・深さ0.43mであった。住居跡の中央から、長径0.64m・深さ0.12mの不整形の掘り込みが検出された。また、北壁の東寄りに径0.38mの小穴を検出した。

住居跡の北西隅付近と東壁に幅0.27mの壁溝を検出した。

カマドは、南壁に造られていたと推定されるが、撹乱のため破壊されていた。

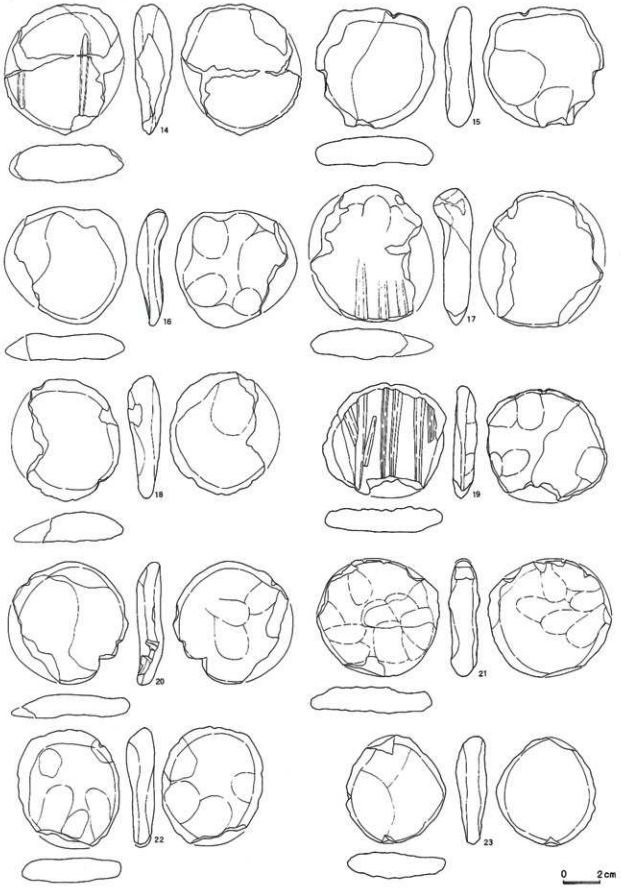
遺構の切り合いは、みられなかった。

1・2は、土師器の坏AⅥである。

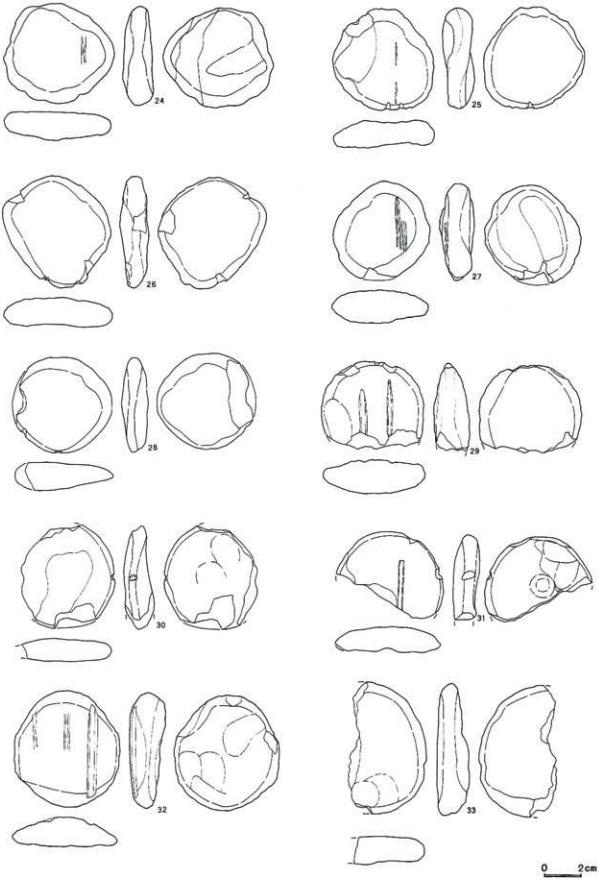
3・4は、高台付椀である。3は、須恵器（HS）である。4は、須恵器（NS）であり、底部外面に墨書「床」がみられる。3・4は、口縁部が欠損している。

5は、土師器の甕である。5は、胴部上位以下が欠損している。

第231図　第138号住居跡出土遺物（2）

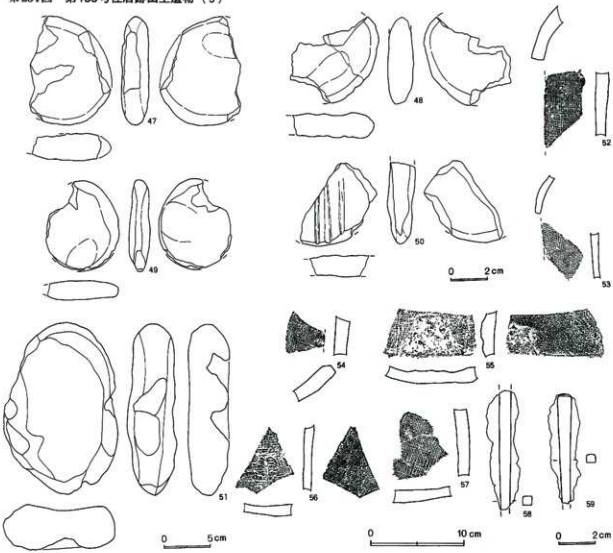


第232図　第138号住居跡出土遺物（3）



第233図　第138号住居跡出土遺物（4）

第234図　第138号住居跡出土遺物（5）



6は、円盤状土製品である。

7・8は、丸瓦である。9から22は、平瓦である。

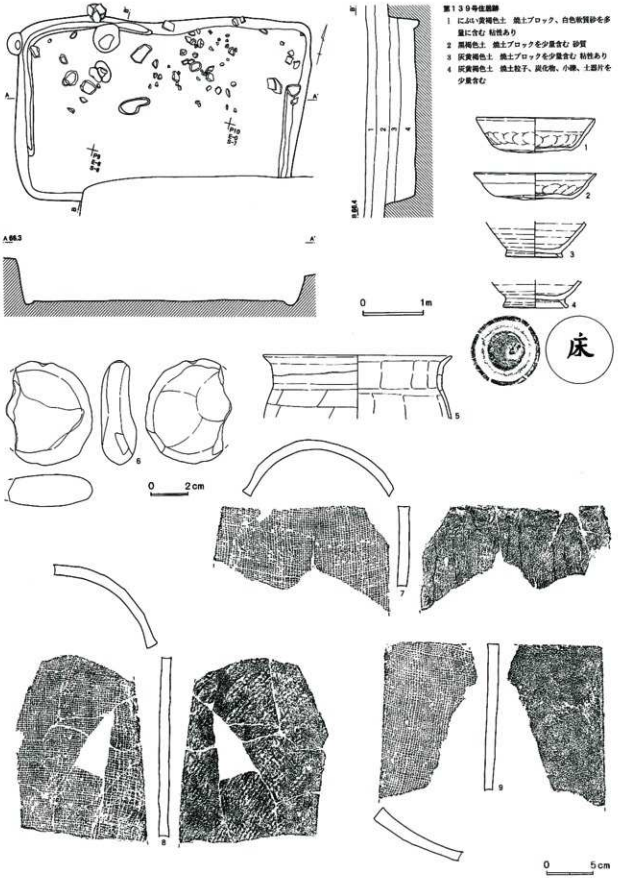
23から27は、鉄製品である。23は刀子？の茎、24は金槌の頭？、25は棒状鉄製品、26は角棒状鉄製品、27は角平棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第139号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

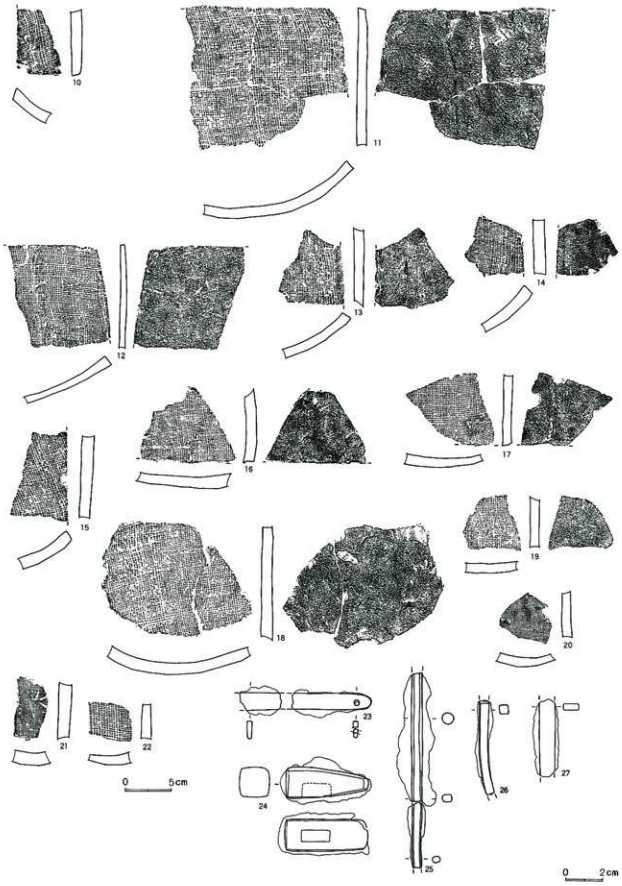
第200表　第139号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	機別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.6		7.7	B, E	普通		橙	50	
2	坏 A Ⅵ	H	13.0	2.8		8.1	B, E	普通		黄橙	40	
3	高台付椀	H S				6.0	B, C, E	良好		灰黄褐	40	
4	高台付椀	N S				6.6	B, C, E	良好		黄灰	30	墨書「床」
5	甕 B Ⅲ c	H				20.0	B, E,	普通		橙	20	

第235図　第139号住居跡・出土遺物（1）



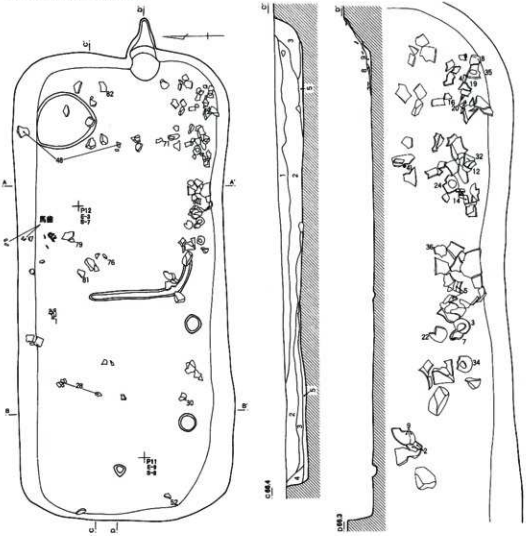
第236図　第139号住居跡出土遺物（2）



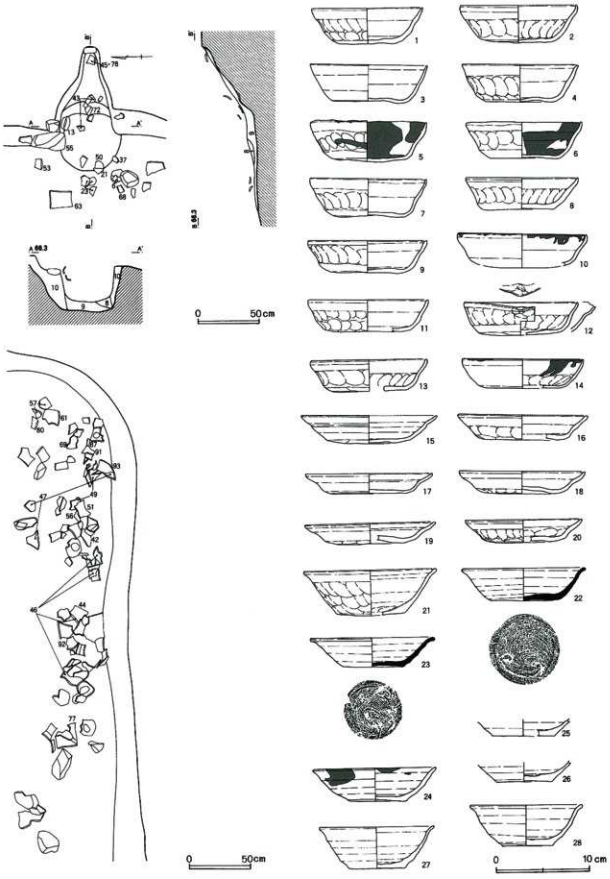
第201表　第139号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面	番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
7	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	3面面取り	15	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
8	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	16	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
9	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	17	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
10	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り	18	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－
11	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り	19	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
12	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	20	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－
13	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	21	平瓦	中間	刷り消し	布	－
14	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	22	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

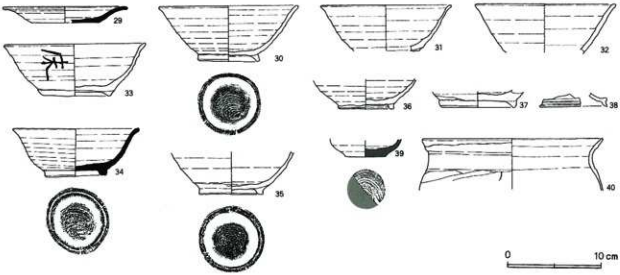
第237図　第140号住居跡



第238図　第140号住居跡・出土遺物（1）



第239図　第140号住居跡出土遺物（2）



第140号住居跡（第237図・第238図・第239図・第240図・第241図・第242図・第243図・第244図・第245図）

P－11・12グリッドで確認した。周辺は、溝や小穴などの遺構が比較的密集し、また遺構確認面が焼土を多量に含む層の上面だったため確認に手間取った。

住居跡の形状は、非常に細長い長方形であった。規模は、長辺7.35m・短辺3.18m・深さ0.17mであった。北東隅に、円形の土壙を検出した。規模は、径0.96m・深さ0.08mであった。また住居跡の中央には、長さ2.03m・幅0.19mの溝を検出した。さらに、南壁の西寄りに径0.29m・深さ0.08mと径0.31m・深さ0.05mの小穴を二基検出した。

主軸方位は、N－94°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、検出できなかった。造らなかったか、非常に短いためであろう。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、極く浅く円形に窪んでいた。燃焼部から煙道部には、小さな段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.47mと急な傾斜であった。

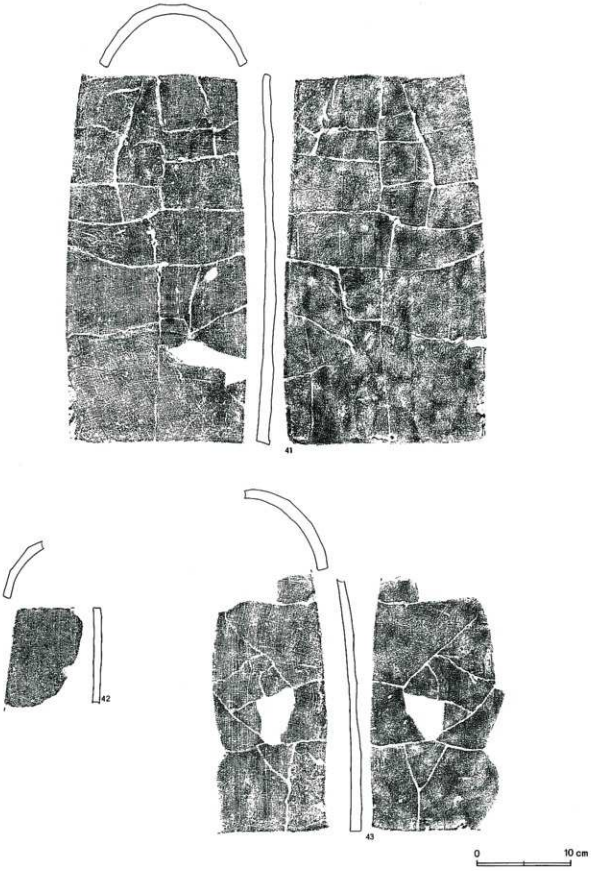
遺構の切り合い関係は、古墳時代の第3号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド周辺から土師器の坏（6・13）、須恵器の坏（21・23）・高台付椀（37）、瓦（43・45・50・53・55・63・68・72・78）が出土した。瓦は、カマド周辺だけでなく、住居跡内から多量に出土した。また、住居跡の南東の南壁際から土師器の坏（2・3・4・5・7・8・12・14・19・20）、須恵器の坏（22・24）・高台付椀（32・34・35）がまとまって出土した。そのほか馬歯が北壁の中央部から出土した。

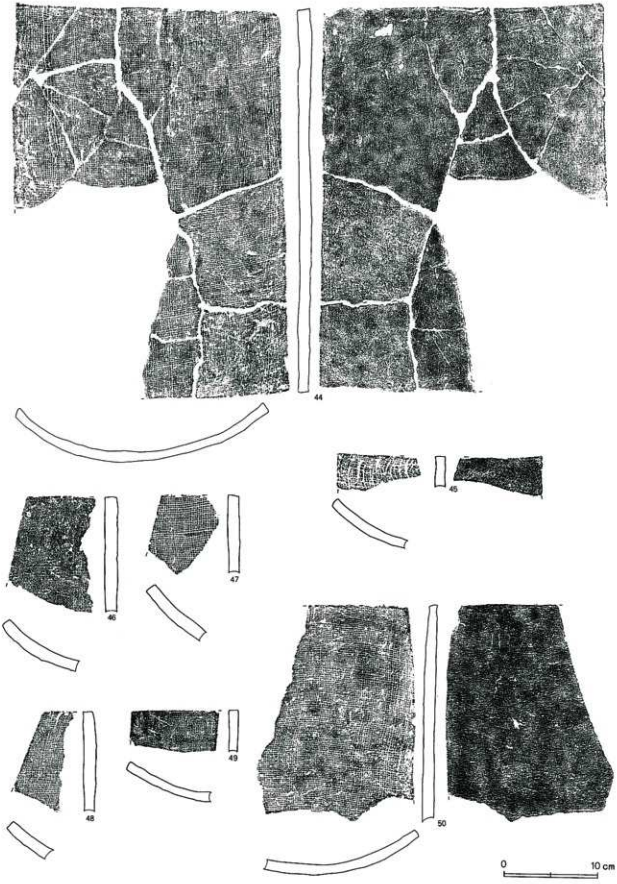
1から14までは、土師器の坏である。3・4・8・12は、坏AⅣである。2・13は、坏AⅤである。10は、坏Aである。14は、坏Cである。他は、坏AⅥである。15から20は、土師器の皿である。21は、土師器の坏BⅣである。10から14・16・19から21は、底部が欠損している。5は外面口縁部と体部・内面口縁部から底部にかけて、6は内面口縁部から底部にかけて漆が確認できる。10・14は口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

22から28は、椀である。22・23が、須恵器（S）である。24から26が、須恵器（HS）である。27・28が、須恵器（NS）である。29が、須恵器（S）の皿である。30から37が、高台付椀である。33は、底部外面に墨書「床」がみられる。38が、須恵器（HS）の蓋である。35・36は口縁部、29は底部、31・32は底部と高台が欠損している。25・26・37は底部のみ、38は口縁

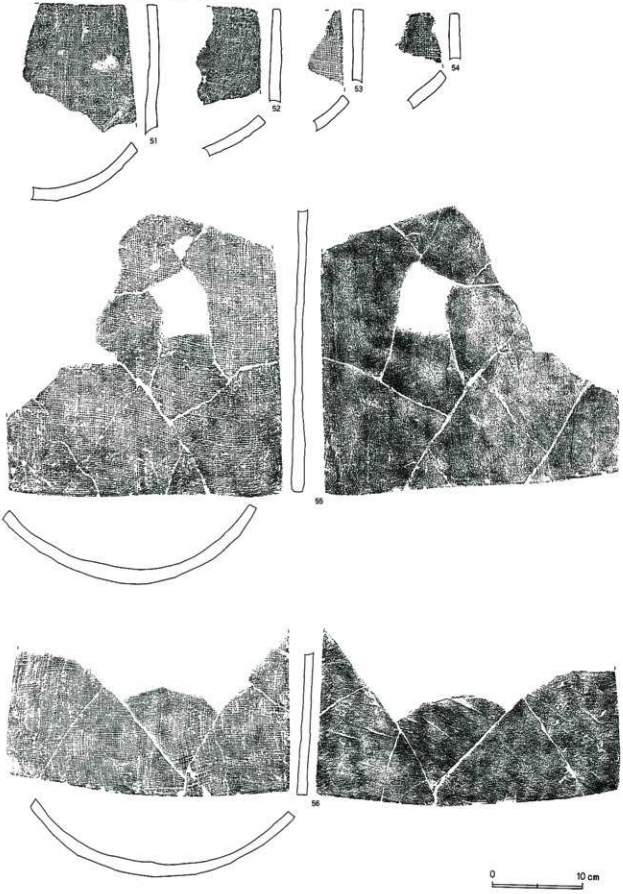
第240図　第140号住居跡出土遺物（3）



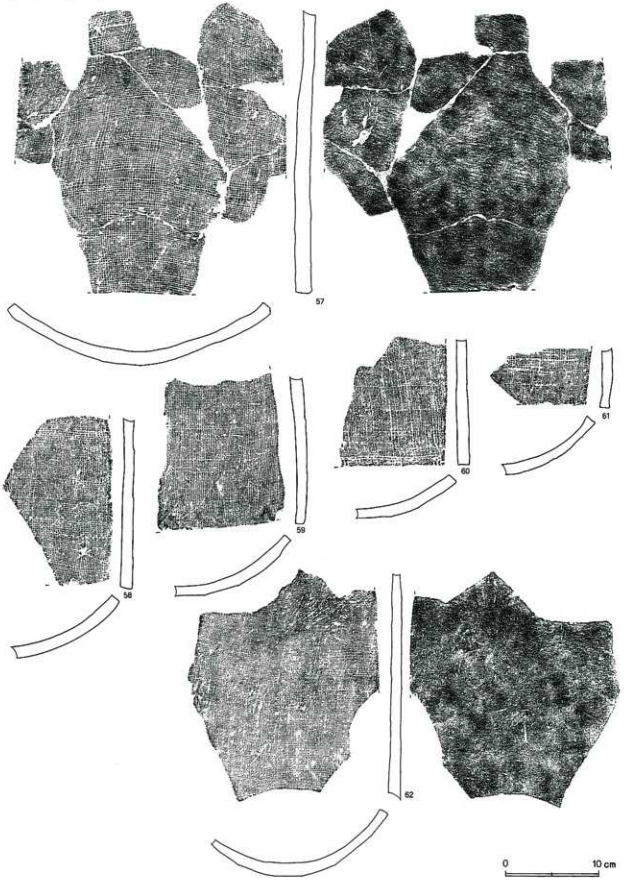
第241図　第140号住居跡出土遺物（4）



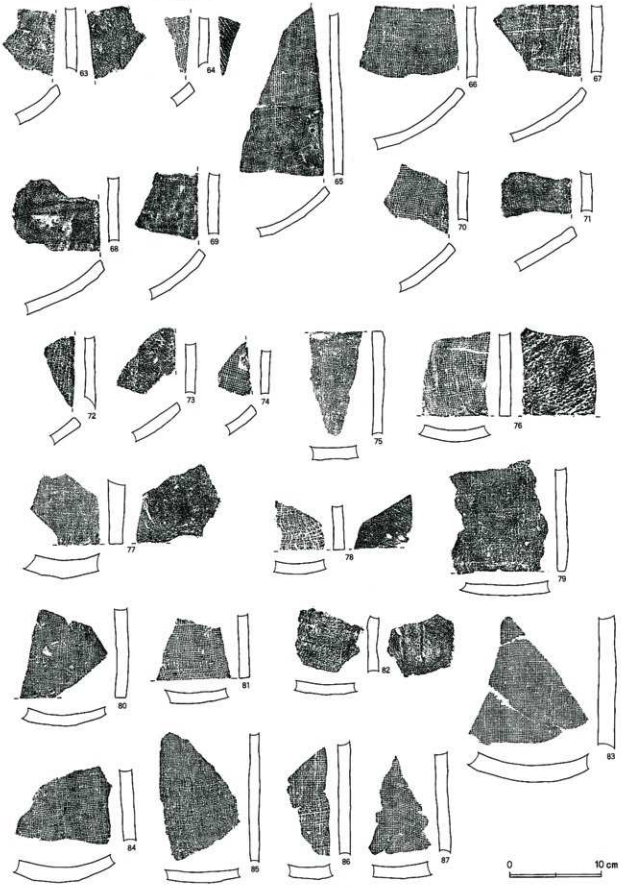
第242図　第140号住居跡出土遺物（5）



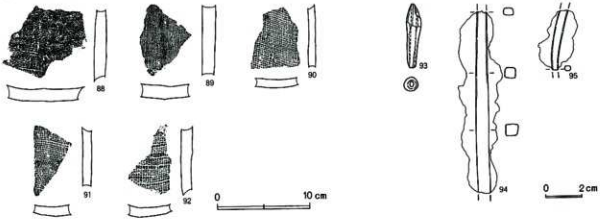
第243図　第140号住居跡出土遺物（6）



第244図　第140号住居跡出土遺物（7）



第245図　第140号住居跡出土遺物（8）



第202表　第140号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.8		6.2	B, E, I	普通		にぶい橙	40	
2	坏 A Ⅴ	H	12.4	4.0		7.5	E, I	普通		にぶい橙	90	
3	坏 A Ⅳ	H	12.5	4.1		8.0	B, E, I	良好		にぶい橙	95	
4	坏 A Ⅳ	H	12.4	4.0		7.4	B, E, I	普通		にぶい橙	50	カマド
5	坏 A Ⅵ	H	12.5	4.2		7.6	B, E, I	良好		にぶい橙	95	
6	坏 A Ⅵ	H	12.3	3.7		7.3	B, E, I	普通		にぶい橙	90	カマド
7	坏 A Ⅵ	H	12.3	4.1		7.8	B, E, I	良好		橙	70	
8	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.4		7.5	E, I	普通		にぶい橙	100	
9	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.1		8.0	B, D, E	普通		暗橙	70	
10	坏 A	H	13.5				B, E, I	普通		にぶい橙	20	
11	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.4		7.0	E, I	普通		にぶい橙	20	カマド
12	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.5		8.8	B, E, I	不良		にぶい橙	90	
13	坏 A Ⅴ	H	12.2	3.3		7.7	E, F	良好		にぶい橙	100	カマド
14	坏 C	H	12.8	3.1		7.7	B, E, I	普通		にぶい橙	40	
15	皿 B Ⅳ	H	14.4	3.0		9.0	B, E, I	普通		にぶい橙	25	
16	皿 B Ⅴ	H	13.8	2.6		7.9	E, I	普通		にぶい橙	20	
17	皿 B Ⅲ	H	13.5	2.1		8.0	B, E, I	普通		にぶい橙	30	カマド
18	皿 B Ⅴ	H	13.4	2.4		6.8	B, E, I	普通		にぶい橙	25	
19	皿 B Ⅳ	H	13.9	2.2		7.5	B, E, I	普通		橙	30	
20	皿 B Ⅳ	H	12.5	2.4		7.0	B, E, I	普通		橙	40	
21	坏 B Ⅲ	H	14.0	4.8		7.3	E, I	普通		にぶい橙	20	カマド
22	椀	S	12.9	3.5		7.1	B, K	良好	R	青灰褐	100	
23	椀	S	13.0	3.1		6.1	B	良好	L	灰	90	カマド
24	椀	H S	13.0	3.5		6.1	B, E, H, K	普通	R	外－浅黄橙。内－灰白	100	
25	椀	H S				6.6	B, E, I	不良	L	橙	10	
26	椀	H S				5.8	B, E, I	不良	L	にぶい橙	20	貯蔵穴
27	椀	N S	12.2	4.3		5.8	B, E, I	不良	L	灰黄	70	カマド
28	椀	N S	11.6	4.4		5.3	D	不良	L	灰白	90	
29	皿	S	13.0	1.7		7.1	F, G	良好	L	灰	30	
30	高台付椀	H S	14.6	5.9		6.2	B, E, I	普通	L	淡黄	60	
31	高台付椀	H S	13.9	5.5			B, E, I	普通	L	浅黄	30	
32	高台付椀	N S	14.6	6.7			B, E, I	普通	L	灰白	30	
33	高台付椀	H S	14.7	5.5		6.8	B, C, H	良好	L	外－灰白。内－淡黄褐	80	墨書「床」
34	高台付椀	S	13.2	5.3		6.3	C	良好	L	青灰褐	80	

第203表　第140号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
35	高台付椀	NS	13.8	5.1		6.8	B	普通	L	灰黄	80	
36	高台付椀	HS				5.4	B, C, E	不良	L	黄灰	60	
37	高台付椀	NS				7.7	B, E	不良	L	灰白	20	カマド
38	蓋	HS					B, C, D	不良		オレンジ	10	カマド
39	耳皿	K				4.3	B, D	良好		灰	30	
40	甕 A Ⅲ c	H	19.1				E, F, I	普通		茶褐	10	口縁部のみ

第204表　第140号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
93	褐灰	90	3.5	0.7	0.2	2.2	C 3	Ⅱ b	639	

第205表　第140号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面	番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
41	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	4面面取り	68	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
42	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	69	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
43	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	70	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
45	平瓦	中間	刷り消し	布	2面面取り	71	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
46	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	72	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
47	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	73	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
48	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	74	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
49	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	75	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
50	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	76	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	1面面取り
51	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り						
52	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	77	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
53	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	78	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
54	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	79	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
55	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	80	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
56	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	3面面取り	81	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
57	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	3面面取り	82	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
58	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	83	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
59	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	84	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
60	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	85	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
61	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り	86	平瓦	中間	刷り消し	布	－
63	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	87	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
64	平瓦	還元炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り	88	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
						89	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
65	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	90	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
66	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	91	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
67	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	92	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

部破片である。24は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

39が、灰釉陶器の耳皿である。底部のみである。

40が、土師器の甕で胴部上位以下が欠損している。

41から43は、丸瓦である。44から92は、平瓦である。

93は、土錘である。

94・95は、鉄製品である。ともに棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第140号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

報告書抄録

ふ り が な	なかぼりいせき
書　　名	中堀遺跡
副　書　名	御陣場川堤調節池関係埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第190集
編 著 者 名	田中広明・末木啓介
編 集 機 関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒369－01　埼玉県大里郡大里村大字笑輪884　TEL 0493－39－3955
発行年月日	西暦1997（平成９）年12月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °′″	東　経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調 査 原 因
なかぼりいせき 中堀遺跡	さいたまけんこだまぐんふかさとまち 埼玉県児玉郡上里町 おおあざつつみあざなかぼりうんなり 大字堤字中堀南763 番地他	11385	017	36°14′44″	139°08′10″	19910401 ～ 19941231	27,000	調節池建設

所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特 記 事 項
中堀遺跡	集落跡	縄文時代		抉入尖頭器 土器　石器	
		古墳時代	住居跡６　溝１	土師器	
		奈良・ 平安時代	住居跡258　掘立柱建物跡65　建物地業跡３　区画溝33　溝42　集石列１　柵列23　道路状遺構２　橋状遺構１　土壙730　土壙群４　井戸跡３　竪穴状遺構14　鍛冶炉跡17　大甕埋設遺構15　土器埋設遺構14　馬骨・人骨出土地点17　畝状遺構３　風倒木跡２	土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 白磁 石製品 鉄製品 銅製品	遺跡内は、溝により区画された大形掘立柱建物跡・住居跡が整然と配置。 帯金具・漆紙文書・刻字紡錘車・墨書土器等出土
		中世	竪穴状遺構16　掘立柱建物跡２　溝４　集石29　火葬墓１	磁器 陶器	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第190集

上　里　町

中堀遺跡

御陣場川堤調節池関係
埋蔵文化財発掘調査報告
第１分冊

平成９年12月10日　印刷
平成９年12月26日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－01 埼玉県大里郡大里村大字笑輪884
電話　0493（39）3955
印刷／有限会社　平電子印刷所